
仮題 弥也子～美晴ヶ峰のお嬢様シリーズ塩野弥也子～

かとう みき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮題 弥也子と美晴ヶ峰のお嬢様シリーズ塩野弥也子

【Nコード】

N1100Z

【作者名】

かとう みき

【あらすじ】

姉の結婚は失敗だった。

いや、姉の態度が問題なのだ。

10才の子供が冷静に観察して、ゆっくりと成長する。

反面教師の存在は確かに効果があり、少女は賢い結婚をしたが、恋心が介在すれば困惑する事ばかりだった。

成長してからは、お約束的なプチハーレクイン目指しますww

子供時代は長いですが、本編を恋愛？と結婚にして、他の「お仕事する弥也子ちゃん」や「小学校の弥也子」などはサイドストーリーとして追加していきます。

素直じゃないから恋なんかして無いと常に云い張る主人公ですが……

早めに本編終えたら一度完結して、ゆっくりサイドをUP予定です。

本編完結予定日：2012年1月中旬か下旬

一気書きの癖の所為で、時々荒れた文体を曝してお恥ずかしいです（〃Д〃）

おいおい訂正します〜m（・・）m

1話 反面教師

姉の結婚は失敗だった。

ありがちな事だけれど、家柄と財産から選ばれた結び付きで、姉が愛された訳では無かったのだ。

とは云え、義兄も同じように思っているだろう。
お互い様だと。

私の見るところそうではない。

姉は確かに義兄を愛している。唯、自尊心が邪魔をして、素直になれないだけだ。

義兄の浮気に傷付いて、恨んで、それでも何も云わないのも、同じ理由からだろう。

端から見る限り冷えきった夫婦で、まさしく政略結婚の成れの果て、と云うに相応しい。

けれども私に云わせれば、彼らの失敗は政略結婚の所為ではなく、彼ら自身の行動の不味さだったと思う。

確かに、義兄は現在姉に対して愛情を抱いてはいない。どうひいき目に見たって、それは動かしようのない事実だろう。

でも当初は違う。彼は自分の妻になる女性に惹かれていた。そして彼女が恋人と引き裂かれて自分と結婚させられた事を知った時も、彼女の頑なさの事情が解つたと云って落ち込みはしたけれど、却って愛情は深まるようだった。情報提供者の私にフルーツパフェをご馳走してくれ乍ら、彼は云ったものだった。

彼女を幸せにしたい、と。

けれども人はいつ迄も待てないし、実家の権威を振りかざす妻の態度に、彼が疲れたのは仕方がない事だった。

月に一度か二度、美味しいお菓子や面白いゲームに依って買収され続けた私も、それに気付かない訳でも無かった。

そして、それはいつの間にか買収の意味を為さなくなった。

度々逢えば親しみも増して、彼は私を実の妹の様に可愛がる様になった。反比例する様に減ったのが、姉への愛情である。

彼が、他の女性に慰めを見出だす頃、姉は彼を愛する様になっていた。

皮肉な話だ。

内緒だと云い乍ら、月に2、3回しか逢わない義兄の話を、義兄と暮らす姉に尋ねられる。同じ様に、食事や服で釣られて、私は協力したものである。

如何な幼い私でも、彼らの行き違いの原因が、那边に有るかくらいは理解した。

普通に云えば良いのに、と姉に云って。

姉は意地を張ってるだけだと、義兄に伝えた。

どうして二人共、心に思った事を云えないのだろう。

思ったままを云わないにしろ、お互いに満更でもないなら、優しい素振りひとつで、ずっと物事は変わってくるのに。

姉はどうしても素直になれなくて、義兄の心は益々離れた。そしてある日、姉は泣いて帰って来た。

私が十歳の時の話だ。

何だか家の中が騒がしい気がして、私は寝台から起き出した。

時計を見れば11時だった。

夜更かし好きの私だったけれど、その日は9時に就寝したから、寝過ごしたとしても午前中の筈もない。

それに、起こすなと云われない限り、日曜とは云えメイドは9時には声を掛ける。

やはり夜の11時だろう。だが、この時間に相応しくない喧騒は何事だろうか？

何やら人が叫んでいる様な声が聞こえてきて、言葉は聞き取れない迄も、好奇心ですっかり目が醒めてしまった。

階下に降りると、声は更に明瞭になる。
居間の辺りかと見当をつけて向かえば、泣き声に近いそれが、姉のものを知れた。

「まあ。お嬢様……」

困惑混じりに、どうしようかと室内を伺う由紀に構わず、私は開いたままの扉を潜り抜けた。

「お嬢様。お起こしてしまいましたか……」
「ん。私にもお茶。」

若いメイドとは違い、私が生まれる前から家に居るフミ江は、直ぐに立ち直って横に立ち尽くす春加に頷いた。

「弥也子。」

「うん。」

近くまで行けば、姉は私を抱きしめた。

嗚咽に震え、しがみついてくる軀を何とか受け止め、私は宥める様に背中をさすり、腕を伸ばして髪を撫でた。

小さな子供みたいに、しがみついてくる姿は、常の姉とも思われず、私は溜息を零しそうになる。

「大丈夫。誰もね、此処では姉さんを悪く思う人も、傷付ける人も居ないの。大丈夫よ？」

母が生きていた頃、何かとよく泣いた私を慰めた台詞が口をついて出た。

「大丈夫よ。」

姉も、母に云われた覚えが有るのだろうか？しがみつく力が増した。

抱きしめられてるって体勢なのだろう。だが、しがみつかれているとしか云い難い、姉の様子だった。

「弥也子……もう駄目なの……」

「うん。」

「どうしてえ？」

「うん。」

この場合、下手な事を云うと益々話は拗れるだろう。

私は本当に『何であんなに泣いたんだろう？』ってくらい良く泣いていた頃でさえ口の立つ子供だった。故に、泣きじゃくる相手が落ち着く迄は、とにかく逆らうべきではないと知っていた。

取り敢えず、今の姉は先程より大分増しな状態では有るらしい。周囲の使用人達の、胸を撫で下ろす様子に、どれ程手が付けられなかったかを悟り、姉の事乍ら羞恥を覚えた。

フミ江に目配せをすると、心得た様に必要外の者を下がらせてくれた。

「姉さん。紅茶が来たみたいよ？暖かくして寝るのが良いよ。」

どんなに悔しい事も、哀しい事も、暖かい飲み物と睡眠を摂れば、大分気分は静まるものだ。

「寝れやしないわよ！」

そんなに簡単な事では無いと告げる態度にも、私はニツコリと笑った。

春加がうるたえるのを手で制して、お茶を催促する。

「うん。それじゃあ暖炉に火をいれて、此处ですとお話しよう。」

「……………」

「ね？」

もう一度笑いかけると、姉は頷いた。

私も、本当は執念深い性質だから、怒りの余りよく眠れない事が有る。

でも、いつかは眠くなる。

起きたらご飯食べて、学校行って、ご飯食べて眠って、繰り返してる内に、平気になる。

母が「その内に忘れちゃうわ」と云った台詞には、少しばかり裏切られたけれど、平気になったのは確かだ。

繰り返す内に、私は泣く事もなくなった。

母が亡くなった時にも、同じ様にしてたら落ち着いたから、何が有っても大丈夫なのだと、今の私は思っている。

私の事を小生意気な子供だと云う大人も居るし、心の中で思っている人は多分もっと多いだろうが、私は構わない。

亡くなった母も、生きてる父も、義兄や姉、友達……かどろかは解らないけど、学校の何人ものクラスメート達が私を好きだと云うし、私も私を好きだから。

「久しぶりよね。こうして二人で起きてるの。」

パチパチと木屑が爆ぜる音に、気持ちが和む。

何杯目かの紅茶を、両手でカップを包む様にして、姉はこくりと飲んだ。何処か、子供みたいな仕草だった。

「お酒の方が良いかも……。」

「ううん。少しだけ……そうね、お茶にいれて飲むくらいなら。」

この人は私の姉で、22才の年令よりも、本当はかなり大人びた女性である。少なくとも、周囲の評価はそうだった。

けれど、10才の子供である私と共にいると、時に子供に戻る人だ。そんな時、私たちの立場は逆転する。

正確には、私は常にエラソーだったりするので、逆転と云うのは

違うかも知れないけれど……。

「春加、ブランディ持って来て。そしたらあなたも休んで良いわ。」
「ですが……」

姉の言葉に伺う様な視線が寄せられた。私が頷くと、安堵した様に首肯して下がる。

そんな春加の態度に、姉は少々拗ねた。

「普通、10才の子供の命令を優先する？」

「今の姉さんよりはね。」

「ひどい。」

ぶつぶつと文句を云う。人前では限りなく高飛車な人だけど、我が家でだけは子供に還る。

思えば、その点では私も似た様な性格をしているので、気をつけねば為らない。

この人が泣いて帰って来たのは義兄の事だろう。また浮気の事が、でなくとも余計な事を一言も二言も口にして、止まらなかったに違いない。

この点、物凄く理解出来る。

云い過ぎだと心で思うのに停止出来ない事はよく有る。

私は男の子をよく泣かせた。

もう止めなきゃと思って、見下した視線もそのままに、やり込めて踏みにじって、相手が泣いて逃げ帰る迄停まらないのだ。

その所為でしょっちゅう落ち込んだが、代わりに負けて泣かされるよりは余程増しだと開き直ったりもしたものである。

泣くのは、本当は凄く嫌いだった。

誰に云われずとも知っている。私は負けず嫌いだ。

小学校に上がったばかりの頃は、まだ泣き虫が残っていたが、それも負けず嫌いが原因の悔し泣きだった。

おまけに私は、女の子を泣かせるのは楽しくないが、男の子ならば……いや、好きな男の子ならば、……むちゃくちゃ好きなのだ。いや、だから泣かせるのが。と云うより虐めるのが。

我乍ら困ったものだ。

しかし、自分で云うのもどうかと思うが、やはり私は美少女なのだ実感せずにおれない。彼らは泣かされても泣かされても、私に近付こうとする。

大体がして、最初に私に喧嘩を売って来るのも、好きな子ほど虐めたい子供心理のタマモノで、たまたま私がこういう性格だから虐め返してしまっただけの事なのである。

しかし……だ。

最近の私は考える。

このままではヤバイ。

いつか、私が姉の轍を踏まない保証は無い。

美貌だけで世の中が渡れないのは、姉を見れば火を見るより明らかだった。

おまけに、私の姉だけあって、この人は知性まで有するのに、失敗した。

いや。

今からでも素直に成ればやり直せるかも知れないのに、今更出来ないのだ。

自尊心の高さ故に。

私には理解出来ない事も有るけれど、それは違う人間だから仕方ない。

問題は。

姉の態度に、自分の未来が垣間見える瞬間だった。
よく母も云っていたではないか。

「本当は、泣いた方が得な事も多いのよ？」

姉は泣けない。

今日だって、義兄の前では泣けなかっただろう。
それでは意味がない。

私にだって理解出来る理屈だ。

「姉さん。義兄さんに謝った方が……」

この女は、けれど私とは違う。

将来の不安を抱える妹の前に、誰の所為で此処に居ると思っているのか、安らかに眠れたりするのである。

「謝った方が、絶対自分の為よね。損して得取って父さんが云うけど、本当にそうだと思うわ。」

嘆息して、私は執事の山本を呼ぶ為に、内線を繋いだ。

2話 7才児の失態が招いた現在

「お嬢様。9時ですが、どうなさいますか？昨夜は遅かったですし、もう少しお休みになりますか？」

「ん……………姉さんは？」

「……………その。そつとしておく様に……………」

フミ江が指示したのだろう。如才ないな。私は唸り乍ら頭を軽く振った。

「シャワー。」

「はい。」

由紀は未だ『賢しげな子供』である私に対して、態度を決めかねる面がある。昨夜みたいな時は従って良いのか解らないらしい。

だが、日常の世話に関してなら、完璧に近い働きをする様になってきた。

私の命令は、基本的に最低限の言葉しか無い。日常の事なら、単語のみの場合も多い。

最初の頃は大概のメイドが戸惑う様だが、フミ江の教育が行き届き、私の言葉からするべき事を見付けられる様に育成される。

用意された服に袖を通して、冷たいレモン水を干す。

シャワーを浴びた後には、炭酸かレモン水が欠かせないのだ。

二杯目のそれにストローを意味も無く掻き回す。カラカラと氷の鳴る音を聞くとともにしに聞きつつ、溜息をついた。

天才だなんだと私をおだてる大人は多い。しかし、大人の恋愛は

理解を超える問題だった。

姉はそんな事は思っていない様で安心するが、世の中には好いた相手の為に命を棄てる様な女も多かったりするのだ。

「莫迦みたい。」

「……………っ。」

一瞬手が止まったが、返答を求められた訳ではないと知れば、由紀は行為を再開した。

濡れた髪をタオルで挟むようにして、丁寧に水気を取り、痛まないう様に、細心の注意を払って髪を梳く。

これが彼女の一番大切な仕事なのである。

「壺は割れても替わりが有るが、私の髪に替わりはない。」

一度そう告げた事が有る。それ以来、この仕事の重要性を認識しただけ、真剣に取り組む様になった。

「チーズオムレツ。ポテトサラダ、レタスに貝割れ。キュウリ。バジルのドレッシングは醤油系、少し唐辛子きかせて。別途マヨネーズ。生ハム。パンはトーストとクロワッサン。プレーンヨーグルトも欲しいわね。」

由紀はチーズオムレツと告げた辺りで直ぐに、そつと髪から手を離し、素早くブラシを置いてメモを取った。うん。よし。

復唱も忘れず、私が頷けば内線で注文を繰り返す。

「で、ドレッシングはそれとマヨネーズの二種用意して下さい。多分……………ちよつと待って下さい。」

多少、敬語が覚束ないのがご愛嬌かな。まあ、丁寧なのは確かだし、この程度ならおいおいで良いや。最近大分覚えて来たしね。

正直云うと、ちよいちよい微妙な言葉遣いでウケる。フミ江頑張れ。客人の前に出せる様になるまでは遠いよ。」

私は指導係に内心エールを送った。

由紀が振り返って質問を寄越した。

「お嬢様。マヨネーズはいつものにコシヨウ等混ぜるタイプで宜しいですか？それとも芥子マヨネーズ作りますか？」

「普通。タマゴ少し塊が多め。」

ん。やっぱり上達はしてるな。たまに合格点。

「それで宜しいそうです。タマゴの塊が……はい、そうです。はい。ええ、下でお召し上がりになります。あ……はい」

終わったかと思った通話が続く。

何やら相槌をいくらか打ち、由紀は通話をオンにしたまま、クラシカルな白と金に彩られた受話器を差し出した。

本当に昔の電話なら当然切れているところだ。

「執事長がお話が有るそうですけど。」

「何？」

「料理長に、朝食の用を云い遣ったら連絡を戴きたいと仰有ったそうです。繋がりますか？」

微妙超えて赤点でしょう。ウケる。

素知らぬ振りで、私は頷いた。

道程長そつだなフミ江。

取り敢えず、フミ江が合格点出す迄、接客時は春加に交代だな。

決定しつつ、執事長の張りの有る若々しい声が応答するのを聞く。若い山本の方が余程渋い声だと思うが、悪い声でも無い。

「用は？」

「お早うございます。お嬢様。お手を煩わせまして、申し訳ありません。」

こんな偉そうな口調で彼に対するのは、父か私しか居ない。姉もそうだが、彼女なら主語と述語を組み合わせるだろう。

単語のみ、主語のみと云うのは態度悪い。今の所改める必要は感じないが。

「そろそろ旦那様から定時のご連絡がありますが、どう致しましたよう？加那子様の件ですが、お帰りをお勧めした方が宜しゅうございますか？」

多少密めく声なのは、一応主人の問題だからだろうか。

しかし……何故、この家の人間は私に尋ねるのか。普通、その判断は父に求めるべきだろう。

「昨夜の連絡は無かったの？」

「いつも通り、0時にございました。ですが、お嬢様にお尋ねしてからと。」

「……………要らん。」

父が帰って来ても役に立つとは思えない。

「承りました。では失礼致します。」

私は脱力感を覚える。

世の中間違ってる。私を普通じゃないと世間の大人は云う。子供達も、私を『特別だから』と云う。しかし、この家に育ったにしては、私はかなり『まとも』だと思う。

「由紀？」

「あ、はい。あ……申し訳ありません。」

手が止まっていたのを咎められたと思ったのだろう。慌てた様子で私の髪を握る。
待て待て。

「落ち着いて。……ね？」

「は……はい。」

髪が抜けるのは嫌だ。我が家の家系に髪の薄い人間は存在しないが、義兄の妹さんが若くして育毛剤の世話になった。
その時に思った。女のハゲほど不倖な事は無い。用心するに若くはない。

「あ……あの。」

「ん？」

「いえ……申し訳ありません。」

云いかけて止められると気になるが、本人が納得するのなら言及はしない。

だが。

由紀の表情は、何かしらの補いを求めている。
本人がどう尋いて良いか悩む時は、手を差し延べるべきだろう。

毛先から丁寧に梳ずる手は気に入ってもいる。これからも、この家に居て欲しいと思う。

「思う事はね。気にせずには云えば良いのよ？私は無礼な言動は嫌いだけれど、多少の軽口や無駄話まで咎めたりしないわ。現に、お前が来る前は春加の役目だったけれど、あの娘は髪を梳き乍ら噂話に余念が無かったものよ？」

「は……………はあ。」

だからって、はいそうですかって訳には行かない……………そう云いたげな相槌だった。

仕方がないな。

「私の事はね。子供ではないと思えば良いのよ。少しばかり変わった家で、変わった子供が居ると考えるより、子供の姿をした大人だと思えば、余り困らないでしょう？」

「……………」

返事は無い。

中には、こんな子供は気味が悪いと感じる大人も存在する。この家で育ってしまったからには、仕方がない事だった。

父は、家の事に一切手を出さない。報告を聞くだけだ。それならそれで、執事長なりメイド頭なりに任せれば良いのに、それもしない。

母の死後。あの人が云った台詞は『娘に尋け』だった。

姉は結婚したばかりだった。

家に居る『娘』は7才児。

その『娘』に指示を仰がねば為らない、使用人達の困惑は如何ば

かりか。憐れを催す話だろう。

しかし、指示を仰がれた私はもつと堪らない気持ちだった。

一種の天才だなどと持ち上げられる私だが、不覚にも気付かなかった事実がある。

それが、形だけだと云う事実。

いや、形だけに成る筈だったって事実を。

取り敢えず父の命令だから、私に尋ねてみた。それだけの事だったのだ。

子供が対処出来る訳が無い。だから、尋ねて、命令を果たした。その後は、執事長の岸とメイド頭のフミ江が万事引き受け、取り仕切るだけだったのだ。

本来なら。

そうは成らなかった。

私は真面目に応えてしまった。

女主人として。

亀の甲より年の功。あの二人は動じなかった。若しくは、内心の動揺を押し隠した。

でなければ、マグレだとも考えたのかも知れない。

その時は。

私は母親べつたりの子供だったから、単に母の真似をしたと思われたかも知れない。

実際。真似をしたのだ。

こんな時は、母ならこうした。この場合はこうする。

私には容易く解る事だった。

二度、三度。そして更に回数を重ねれば、マグレ話では済まなくなる。

戸惑いつつも、彼らは新しい主人として、私を受け入れたのだ。

情けないったら。

子供ぶりっ子は音を立てて崩れた。

つまりは私の未熟の証明みたいなものだ。

母は私に対して何度も云っていた。

『そういう事を、人前では云わないのよ？』

母の云う通りにしていれば、私はもう少し子供らしかったろうに。父の所為で、私は加速度的に子供らしさを失う羽目になった。

最近の私は開き直ったと云っても過言では無いだろう。

子供扱いして貰えない寂しさと、一目置かれた状態の気楽さと、殆ど二律背反に等しい感情が有る。

子供ぶりっ子は疲れるから別に良いけどな。家ではやっぱり寛ぎたいし。

しかし天才と呼ばれても、私の場合は単なる精神年令の高さと云うべきもので、何かしらの分野で一家言持てる様な才能は無い。『ハタチ過ぎれば只の人』を地でイケそうだった。

いや、5年かそこらで年相応になれる気がする。

まあ、こんな事を真面目に告げれば、益々『変な子供』のレッテルが大きく貼付けられる気がするので、口にしないけどさ。

階下に下りたら、姉が珈琲を飲んでいた。

「おはよ。」

「お早うございます。お姉さま。」

春加がテキパキと食事の支度をしてくれる。

「美味しい？」

「ええ。」

「私にも。」

この辺りの物の云い様は、やはり姉妹だと思う。
嫌かも。

二人して黙々と食事をしてしまった。別に私は気まずくも無いし、姉も同様だろうが、周囲は気にするだろう。
少し反省した。

取り繕う様に、私はニツコリと笑って、食後のデザート求めた。

「お姉さま。居間で戴きませんか？」

「そうね。」

取り敢えず、歯を磨いてから居間に向かうと、暖炉に火がはいっていた。我が家の使用人は優秀である。

「お姉さま。それで、お義兄さまとは今回どんな理由でケンカなさいましたの？」

「……………」

嫌そうな表情を浮かべる姉に、私はニツコリと笑いかけた。
私の笑顔は天使も斯くやと評判だ。

「お嬢様……。」

フミ江が小さく呻いた。呆れたのかも知れない。

昨夜の愁嘆場の再来を予感したのだろうが、それは杞憂と云うものだ。

私は、私の笑顔の威力を正確に把握している。

姉に対しては、下手に無邪気さを追求したら、わざとらしいと怒りを買うから、容姿の愛らしさのみで勝負。

姉は私を睨み、視線を逸らせた。

「浮気をしたのよ。」

姉は白状した。

よし。勝った。

いや、勝負では無かった。

だが、姉に効くなら万人に効く。私は自信を取り戻す。

最近、木っ端微塵に打ち碎かれた自信を、かき集める私である。

アレは……特別な相手だから、気にしては為らない。

あ、姉の存在を忘れるところだった。

私は、続く言葉を待っていた振りをした。

「他には？」

「他？」

姉の眉が寄る。

「浮気だけなら、いつもの事でしょう?」

「……………子供が、出来たのよ。」

「あら、新展開ですね。」

図らずも的中?

無念そうに告げた姉には悪いが、私は笑ってしまった。

まあ、こういう事も有る。色々問題は有るが、予想出来ない話でも無いだろう。

実際、我が家にも存在する。父を同じくする血縁が。

もう少し気をつけて欲しいが、生まれるものは仕方ないだろう。

「誰にか…………聞かないの?」

呻く様に、姉が云った。

あれ?まさか。

「あら。浮気相手さんにかと思ったのですけど…………。」

「私によ。私が妊娠したのよ。」

その『まさか』だった様だ。

はて?ならば問題は那邊に?

姉の発言と共に、陶器が割れた音を無視して、私は考える。

「失礼致しました。」

春加と由紀が異口同音に粗相を詫びた。

フルーツを盛った器を音を立ててテーブルに置いたのは由紀。後
退りワゴンに衝突して、カップを割ったのは春加。

因みにフミ江は壁に背中を凭れていた。フミ江のそんな振る舞い

は初めて見た私である。

何が、そんなにシヨックなのだろうか？

この話の衝撃ポイントが何処に存在するのか、私には解らない。
私は内心首を傾げたが、取り敢えず放置した。

「お姉さま。それで、どうしてケンカに発展しましたの？」

「浮気を咎めたら……関係無いって。」

「何故ですの？」

私は首を傾げて姉を見上げた。

「勝手にしろと云ったのは、君だろうって。」

姉は唇を噛み締めて、怒りを滾らせた。

私は呆れた。

「それはそうでしょう。今まで無関心な振りをしてらした癖に。そうではなく、どうして責めたんですの？浮気なんて、大した問題でもないでしょう？」

「子供が……出来るのよ？」

何故それが理由になるのか解らない。

姉は時々、意味不明な言動をとるが、まさしく今がそうだった。

私は多分独占欲が強い。誰かを愛したら、一番に愛されたい。同じ土俵に恋敵が立つ様な事態は、我慢出来ない気がする。

浮気なら良い。だが、その女性を愛するのは許せない。

嫌だな。こんな感情。想像だけでも苦しい気がする。

恋などせずに生きて行こう。うん。

まあ……だから、浮気を責める女性の気持ちは解らなくも無い。と思う。

だが、子供が出来る迄は良くて、出来たら駄目とはこれ如何に？

「え……と。子供が出来たら、浮気をしては為らないんですの？」

「弥也子なら許せるの？」

「……………」

10才の子供に聞く？

皆が呆れた眼差しで、私達を見つめていた。

私は嘆息した。

「だって男の人って、浮気する生き物でしょう？」

ガタタン、と響く音。

フミ江が尻餅をついていた。大した事はなさそうなので、そのまま続ける。

しかし姉の問題発言は未だ続くだろう。だから『そのまま座ってなさい』とだけ云っておいた。

フミ江が耐え切れなくなるのも、よく解る。

私でさえ頭痛がする。

「お父さまの所為ね。あんな男と暮らしているから、そんな妙な考えを持つ様になるのよ。」

苦々しい表情で吐き捨て、フミ江をチラリと見遣る。まるで、私の発言の所為でフミ江が倒れたと云わんばかりに。

「まあ。ご自分の事を棚に上げて、よくも仰有いますわね。」

「そのわざとらしい喋り方止めてよっ！」

「わざとらしいって……ま、良いわ。改めましょう。」

正直、姉の望むカジュアルな口調は却って面倒だ。

私は基本的にこの話し方で通してるのだが。わざとらしいのか…

……そうか。

少し傷付いた。

「で？詳しく云いなさいよ。それだけじゃ解らないわ。」

姉の里帰りは頻繁だから、砕けた口調も慣れっこだ。

特に昨夜の様な時は最初からアレで通さないと、収まるものも収まらない。

しかし毎回試行錯誤する。

難しいよカジュアル＆フランク。

訳が解らない事ばかり云うし、注文は多い。姉の事は好きだが面倒な人だとも思う。

取り敢えず、姉は私の言葉遣いに及第点を与えたらしく、ボソボソと話し始めた。

3話 姉夫婦の関係？

昨日、加那子は診察を受け、自らの妊娠を知った。

父親になる夫にも報せるべく帰宅を待っていると、彼は女性の香水の匂いをさせて帰宅したのだ。

いつも通りに嫌味を云ってしまったが、返された反撃に常ならば捨て台詞で部屋に籠るところを、加那子は踏み止まった。

「とにかく、今後は気をつけて戴きたいですわね。」

「おや。君がそんな事を気にするとは思わなかったな。私の行状になど、興味は無いんじゃないかい？」

「勿論。興味などございませんわ。」

悔しさを押し殺し、いつそ冷ややかに加那子は告げる。

妻の冷たい物云いは今に始まった事ではないが、その見下す様な視線や態度が、不愉快な事に違いは無い。

その美貌に心惹かれた事も有るし、結婚の成り行きを知り、同情した事も有ったが、今では同情されるのは自分の方だと考える直之である。

高島家の夫婦のやり取りは、最近では遇に顔を合わせてしまったが為に行われる、冷戦状態にも似た、短い嫌味の押収に終始している。

常ならば互いに背を向ける辺りで、ソファに腰掛け語り合う態勢になったからと云って、それは変わるものでは無かった。

最早慣れ切った様子で、メイド達は仕事をこなす。

うんざりだ。と直之は思った。

「それで？奥様は何のご用ですか。君には関係の無い私の事情を聞きたい訳でも無いだろう。」

嫌味つたらしい直之の口調に、加那子の眼差しが更に冷ややかを増した。

その貌が益々美しいのは皮肉と云うものだが、冷たい美貌やり平凡な暖かい笑顔の方が、直之には好ましかった。

「貴方の事情など、どうでも良い事ですわ。私にとっては。」
「そうだろうとも。」

直之は苛立った様に吐き捨てた。そして、皮肉を込めた穏やかな声が続けた。

「お互い様と云うところだね。意見の一致を見て目出たい限りじゃないか。」

その言葉に内容など無い。単なる嫌がらせと皮肉しか、直之は口にしなくなった。

その直之を視つめ、加那子は白い美貌に怒りを覗かせて告げた。

「けれど、子供にとっては違います。仕方がない事ですけれど、父親の行状は子供に影響を与えます。」

「子供？」

眉を顰めた直之に加那子は云う。

「4ヶ月です。」

「私の子だとも？」

音もたてずに、彼女は立ち上がった。

スツと、ほんの微かに笑った唇は、けれど冷え切った怒りの証に他ならない。

「貴方と一緒にしないで戴きたいですわね。不愉快です。」

直之の言葉は加那子の心に刃となって突き立った。

けれども、血を流す心は端から伺えるものでは無い。

そこで泣ける性格ならば、ここ迄二人の仲は冷え切る事にはならなかったろう。

それでも、夫の前にこれ以上居ると、何を口走るか解らないと加那子は思った。

冷静な態度を保てる内に、彼女は実家に帰るべく、家を出たのだ。

心のまま、取り乱して泣いてしまえば良かったのに。

その場に弥也子が居れば、そう忠告しただろう。

端から見れば、これ以上ない程に冷静に映った彼女の態度。それは、どう考えても彼女にとって、そして直之にとっても、不倖でしか無かった。

姉の話は、都合の悪い発言を隠しているかも知れない。勿論、義兄の心中を慮る筈も無く、云われた台詞だけを不快を込めて口にした。

だが、誉められたものでは無い発言を、義兄にさせたのは姉の態度だろう。姉が語らない部分こそが、裏を悟らせるに足る。

私は多分。当事者である姉よりも、その状況を理解したのでは無

いだろうか？

こんなに、客観性に欠けた女性だったかな？賢い姉は何処に行ったんだろう？

私は、姉を変えてしまった『恋』だの『愛』だのが、ちよっぴり怖いと思った。ちよっぴりね。

しかし。

いくら何でも……と思う。

姉の話が終わると、私は嘆息した。

「莫迦じゃないの？」

「それは勿論、あの男に対する台詞でしょうね？」

私の呆れた口調に、姉は硬い声で応じた。

「義兄さんの何処が悪いの。当たり前でしょう？姉さんが莫迦なのよ。」

「もう一度、云ってご覧なさい。」

怒りに震える声は、冷たく冷える。

彼らに見抜けないのも無理は無いけれど、私には生まれた時から
の付き合いが有る。

これは、悔しくて泣きそうな顔だ。

「解ってる癖に。どうして態度改めないの？何度云ったら解るの。
今なら間に合うのよ？義兄さんに謝って、好きだって云えば良いだけでしょう？」

「……………」

キリキリと睨み付けてくる眸に溜息が漏れた。

「自分の損になるだけなのに。」

理解するのは不可能だ。

私は頭を振って肩を竦めた。

怨みがましい視線を無視して、フルーツを摘む。

さて、どうしたものかと考える。

「で、いつまで此処に居るの？高木さんや良子さんは姉さんの事を解ってるし、義兄さんとは滅多に逢えないんだもの。気まずい訳でも無いでしょう？」

召し使い達の大半は、姉に好意を抱いている。高島家に代々仕えて、直之に絶対の忠誠を誓っている時代錯誤な人達も、私と話をする姉を見れば大体の事情を察する。

私は誤解され易い姉の為に、姉を頻繁に訪ねたさ。

しかし、最初は仲を取り持つ努力を惜しまなかった彼等も、最近では諦め切っている。

姉の強情は一筋縄ではいかないのだ。

いつか、もしかして……と僅かな希望に縋るのみの彼等である。

私があの人に度々通わなければ、未だに使用人からも誤解されてたかも知れない姉である。

「ねえ。考えても見て？」

同じ事を繰り返すのも、疲れてしまう。

「何処の世界に、顔突き合わす度に嫌味を云う奥さん、愛せる男が居ると思うの？」

「あの人だって云うわ。」

「姉さんが云うからでしょう。」

姉はそつぽを向いた。

拗ね切っている。

「笑顔ひとつ浮かべない。たまに逢えば嫌味の押収。加えて実家の権威を振りかざし、おまけにもっと稀な夫婦生活の翌朝に云われた台詞はケダモノと来た。」

ギョツとした様に振り返る姉に、唇の端を吊り上げて問う。

「いったい、何処に惚れる予知が有るの。」

「どうして知ってるのよ。直之に聞いたの？」

「メイドよ。誰かは聞くな。姉さんの事を心配して、家に来たのよ。信じられない事するわね。私は情けなかった。」

キツパリ告げれば、姉は居心地が悪そうに眸を逸らした。

「あのねえ、酔ってたからって手を出して、奥さん相手に謝る人ってさ、とっても礼儀正しいと思うのよ。私は。」

俯いたまま、姉は顔を背ける。

「その夫に対してケダモノ……。云うに事かいて、よくもまあ。」

そこで自らも謝罪して、互いに歩み寄れなかったのかと思う。

情けなさ過ぎる。

「それで出来た子供に対してだよ？多少イヤミを云って何が悪いって、私は思うよ。」

私がそこ迄知っているとは思わなかったのだろう。姉は首を竦めて微動だにしない。

「おまけに子供が出来たから行状を改めろ？我が姉乍ら……………」

みな迄云わず、そつと息を吐いた。

云い過ぎた。と、少し…………いや。かなり思う。
姉を泣かせるまで追い詰める気も無い。

しかし、義兄の立場を考えれば、これくらい当然な気もする。

「少しは反省してる？」

それでも、優しい声を出して問い掛けた。

「……………はい。」

「ま、好きなだけ滞在なさいな。帰りたくなったら、ちゃんと協力して上げるし。此処も、姉さんの家だからね。」

「ゴメン……………なさい。」

「うん。私もゴメン。云い過ぎたね。姉さんも、例え全然実にならないにしろ、努力の影も見えないにしろ、頑張ってはいるんだものね。」

消え入りそうに萎れた声に、私は寛大を示したが、扉の陰から「惨い……………」と小さく聞こえた。

当の姉も恨めしそうに、半分俯いたまま視線だけが私を見上げた。

かなり控え目に云ったつもりですけどね。と嫌味ったらしく云ってやりたいが、グツと堪えた。

この姉に引き比べて、何故私の性格がキツイなどと云えるのか。私には皆目解らない。この人の行状を考えて物を云って欲しいし、姉自身には反省を促したい。

それとも、私はやはり子供で、考えなしだったりするのだろうか？ 大人には難しい事を、やれと云い張る子供なのだろうか？ 未だ、大人でない私には判別し難い問題であった。

4話 姉夫婦の関係？

午後を回った時間に、私は家を出た。

何処に行くのかと姉に聞かれ、友人の家と応じたのは思いやりと云うもので、事実には義兄と逢う為である。

義兄に逢う時の常で、車は先に帰した。しかし今日は、玄関まで送って貰うのは不味かろう。

門の手前で義兄には帰って貰う事にしよう。等と、私は帰宅時の心配りをしつつホテルのロビーにて義兄を待った。

「やあ、お姫様。また待たせちゃったね。」

済まなそうに謝る義兄に、首を振って立ち上がる。

義兄に対する私は、出来るだけ素直に心を曝す事になっている。

義兄は素直な人間が好きだ。彼は鏡の様な人で、相手を素直にさせる穏やかな人柄は、だが頑なな相手には幾らでも非情になれる一面も持つ。

少なくとも仕事上は。

それくらいでなければ、父が姉の相手に選択する訳もない。

私は、彼の優しい人柄を愛してるから、そんな一面と遭遇する気は無かったのだ。

実際。

姉がいつ見限られるか、私は気が気では無い。

今なら間に合う、が、義兄の心境が変化すれば、姉がどんなに素直になっても駄目になる日が、いつかは来るだろう。

現に、義兄は姉に対抗して嫌味を発する様になったではないか。

「お義兄さま。緑さんと喧嘩なさった？」

「……………何故？」

笑顔が引き攣り、義兄は僅か乍ら狼狽した。

その頬に目立つ程では無いが、痣があるのだ。

転んだり、アクシデントに依る類いの傷で無いのは、何となく解ってしまふ。そして、姉との冷え冷えとした諍いで、怪我をする筈もない。

それに、昨夜は香水を香らせて帰宅したと云うではないか。
じっと見上げる私に、義兄は溜息を零した。

「どうして解るのかなあ。」

穏やかな優しい声が、諦めた様に云って歩き出す。
差し延べられた手に掴まり、私は尋ねた。

「緑さん、お元気？」

「ああ。知らない程ね。」

うんざりした声に同情を覚えた。彼には女難の氣があると私は考える。

だが、これは希望だ。姉の為には、彼が他の女性と倅せに成るのは歓迎出来ない。

「食事とお茶はどちらにしますか。お姫様？」

「お茶。」

「じゃあティー・ラウンジにしようか。」

こつくり頷いた。

今日は少々食べ過ぎた気がするので、お昼は遠慮したい気分だった。遅い朝食だったし。

「何が良いかな。お茶が済んだら服でも見に行こうか？それとも玩具おもちゃが良いかな？」

「ううんと……。本が良いかも？」

「また僕に理解出来ない物を買うんだね？」

少し哀しそうな表情で、義兄が云う。

いや。あれは。あの作者があんな話を書くとは、私も……。ま

あ義兄との親しみが増したから結果オーライだ。

義兄は私の過失を揶揄う種にしたらしい。

それ以来、私は遠慮なく読みたい本を手にする事にした。

結果オーライだけど……。ちょっぴりムカつく。

悪かったな！変な趣味で！！

ふうつとか、わざとらしい溜息吐くし。

まあ、良いけど。

別に良いけど……。

私は多分、揶揄われるのは好きでは無いと知った。

でも義兄の事は結構好きだから許すよ。うん。

「お義兄さま？少しばかり失礼かも、とは思われませんか？」

私は一応の反論を試みる。愛らしく見えるだけと知りつつ、柔らかい口調で、少し睨む様に見上げた。

案の定、義兄は可愛くてならないと云わんばかりの眼差しで私を見た。

気安い云い合いも楽しいらしく、気取らない笑顔が浮かぶ。

「でもねえ、10才の子供が読む本でも無いでしょう。君のは。」

「大人も子供も楽しめる本なら、無駄に棄てる事も無いでしょうし、良い事ですわ。」

澄まして応えれば、クスクスと笑う義兄。

「だから、子供は読まないって。」

「読んでますわよ。」

「だから理解出来ないと云ったんだろう？時々本当に理解出来ないものも読むし。」

後半は少々困惑気味に云われた。はて？私は専門書の類いは流石に強請った事は無いのだが。

「女の子同士の恋愛小説なんて、今から読んでちゃダメだよ？」

的は私の失策だったよ。

じゃあ最初の話題は何に対する感想だったのさ？

「う……………！あ……………あれは。」

「あれは？」

多少狼狽した私に、義兄は微笑んだ。割かし食えない人だったり

するのである。

「今がダメなら、いつなら宜しいんですの？」

「……ううん。」

私も反撃は忘れない女です。子供相手に揶揄いたおす事など出来ないと思し召せ。

なんちゃって対決だけだな。

私の前に居る義兄は、いつも優しくて穏やかな人だ。非情な顔はプライベートでは見せられた事がないと云う話だが、この先もそうだとはい限らない。

私は姉の為に、我が家の為に、そして義兄の為に祈る日々である。

どうか義兄が優しい内に、姉の態度が改まります様に。

義兄は私の心配も知らず、呑気に考える。

解答を思い付いたらしく、ポンと手を叩いた。

「16才ってのはどうだろう？」

「その心は？」

「親の許しが有れば、結婚も出来るし。」

「普通、女の子同士の結婚を許す親がおりますかしら？」

困惑混じりに首を傾げて見せたら、義兄は人差し指を立てた。

「君のお父さん辺りは許すタイプと見た。」

それはまったく凶星に近くて、私は吹き出してしまった。

二人して笑っていたら、アイスクリームのクレープが来た。義兄には珈琲。

冬の最中さなかにと笑われたが、暖房が効く室内で食べるのが良いのだ。私は冷たいスイーツを堪能した。

此処のケーキやパフェは絶品だとも思うが、アイスクリームも当然の様に美味しい。

至福かも。

私は基本的に食いしん坊なのだな。

「美味しそうに食べるねえ。」

スイーツにうつとりしている私を見て、義兄は嬉しそうに笑う。美味しそうに物を食べる人間を見るのは、彼の楽しみのひとつである。

良い趣味だ。うん。

此処で、姉さまも美味しそうに食べる等と云えば、機嫌が悪くなるかなあ、やっぱり。

本当の事だけれど、義兄にとっては偽りなものね。

「赤ちゃんが、出来たんですってね。」

「……………加那子さんは、やはり塩野の家に帰ってるのか。」

少しばかり苦々しい口調と表情だった。困惑は一切なし。怒り少々、根っこは……………苛立ち……………かな？

ふうん？やっぱりなあ。

「お義兄さまは、姉さまの事が嫌いではないのね。」

苛立ち怒ったりはしても、嫌悪はしない。

一度惹かれた相手は、嫌いには成り切れないものなのだろうか。だとすれば世の中も少し倅せなカップルで溢れてる気がする。これは義兄の寛大さと云うものだろう。

そう考えると、却って気の毒な感じがする。

「嫌いじゃない？」

ムツとした様に義兄は繰り返す。「冗談だろ？」とでも云いたげな口調だ。

彼は思い切り否定しようとして、私の立場を思い出したらしく、様々な言葉を口にしたい気持ちを堪えた様だった。

別に良いのに。

「疎ましいとは感じてても、嫌悪なさってはいないのね。」
「何を云って……………」

義兄は戸惑う表情を見せて、口籠る。

反論するかと思っただが、子供の戯言を怒るでも無く考え込んだ。義兄は少し哀しそうに笑った。

「そうかも知れない…………とは思っけどね。彼女があのままなら、愛せないのも確かだよ。」

私はびっくりした。

眸を丸くして、マジマジと義兄を視つめたと思う。スプーンを口から引き抜くのもどかしく。

「愛する気は有るんですの!？」

辺りを憚りつつも、勢い込んで尋ねた。
やっぱり今なら間に合うのね!？」

「……………君は。」

眉を寄せ、困った様な顔をして、義兄は長い長い溜息をついた。

「君ねえ。」

「はい。」

ドキドキと言葉の続きを待つ私に、義兄はまた溜息を零して苦笑した。

テーブル越しに腕が延ばされ、掌がそつと頭に触れた。

びっくりした。

私の頭を撫でようなどという人が、未だ存在するとは。いったい何年振りだろう。

キョトンとした顔を、していたかも知れない。

義兄は眸を瞬く私を見て、優しい眼差しで困った風に微笑した。

「そうやって子供の顔をして。君が未だ10才の子供だというのは、一種の犯罪だと思うね。」

犯罪と云われても……。

それは私がどうこう出来る問題では無い。

その言葉自体は嫌な感じだが、口にした義兄の表情は優しい。

別に、今更気持ち悪い子供だと思ふ風でも無いし、そんな人でも

無い。

「早く大人になりなさいね。この手の話は、もう少し……場所柄と云うものが有ってね。」

「……TPOがなっていないって事？」

大人って解らない。

なら、どんな場所なら良いのだろう。私の困惑に義兄は頷く。

「そう。こんな明るい場所で、昼間っから話す事では無いね。例えば、静かな店で、酒でも酌み交わしつつ、静かな声で語り合うものだ。」

「そんな相手居ないのに？」

「う……それはねえ。……居る様には見えない？」

義兄は情けなさそうに尋いて来た。いや。心配しなくても義兄の人格に問題は無い。

友人も沢山居るだろうと思う。

ただ、そうして愚痴を聞いてくれる相手が居ないだろうと気付いたのは、他ならぬ義兄の発言に因る。

どうやら無意識らしいが、「と、思うよ？」等と自信が無さそうに呟いたから、居ないんだなと思ったただけだ。

義兄が気付かない発言を、親切に教える事はしない。手の内を隠すのは私の第二の習性だった。

人間と云うのは単純なもので、隠し事が通じない相手だと思ったら、そもそも隠す事自体を止めてしまふ場合が多々有る。

それが無意識の場合は、やっぱり隠せないと認識を深める事になる。

義兄も、私の幼さに油断して嵌まった罠だった。

私以外の相手なら、義兄は自分の言動を振り返り、失言に気付いた筈である。

現在の義兄は私に秘密は持てないと、すっかり信じているのだ。うん。大丈夫。別に情報悪用しないから。今のところ夫婦の話題しか無いから、しようとしても出来ないけど。

しかし、子供の言葉にそんなに落ち込まなくても……可哀相になったから云った。

「ええと、いらしたら……私相手に、そんなお話をなさらないかな……と。」

「そう。まあ、それはそうなんだけど……。」

納得していない口調だった。俺って人望無さそうかな……等と呟いたりしている。

私は、もう少し適当な理由をでっちあげる修業の必要性を感じた。義兄の名誉の為に云うなら、この人は人望を誠意で勝ち取るタイプだった。仕事では非情な一面を持つと云ったが、それさえも被害を広げないタイプだと父が云っていた。

『性格は甘ちゃんだが、為すべき時は完膚なき迄に叩く。一点集中攻撃型だな。後のフォロ―も完璧だ。多分、自分の名を守る為では無く、周囲の為にしてる様だが……まあ結果が同じなら良いだろう。』

父の評価は身も蓋も無かった。
だが、良い人なのは絶対だ。

あれだ。

相談事とかされて、親身に聞いて上げるタイプの人よね。
多分、この人が愚痴を零す相手が居ないのは、頼られる所為もあるに違いない。

あ、これをそのまま云えば良いのよね。

「お義兄さまは、ご自身が愚痴を零されるより、聞いて差し上げる人に見えるし。」

このフォローは悪くなかったらしい。

事实は強いよね。

嘘はやはり見破られるものでしか無い。

私が下手なだけかも知れないけど…………。

そう？等と安堵すると共に、満更でもなさそうな義兄を視つめて私は考えた。

しかし。

子供の発言に振り回され過ぎだろう。

私の周囲の人間は、大抵私を買い被るが、義兄も大概その傾向が深い。

確かに私が誘導したのも有るが…………所詮子供だから、そんな大した人間でも無いんだけどな。

普通は子供の意見など聞き流すものだが、それをしない周囲の大人たちは、それだけ人間が出来ていると云う事かな。

それとも変な大人が私の周囲に多いだけだろうか。

私の判断を迷わせる議題だが、今考える事はそんな問題では無かった。

姉とこの人の結婚生活だ。

少なくとも希望が無い訳ではないのだと思えば、私はやっぱり嬉しかった。

元々、姉の為にこの人に気に入られ様としたのだが、義兄の人柄は私の好意を本物にさせた。

勿論、姉の事は大好きだから、その二人が仲良くしてくれるなら、それに越した事はない。

姉には、もう少し素直になって貰わねば。
そんな事を考えつつ、私は帰宅したのだ。

5話 私の婚約者？

幼い頃、私は姉に対して様々な苦言を呈した。

それは要約するなら一言でしかない。義兄に対して素直になりなさいという一事に尽きた。

「何よ！今迄そんなに煩く云わなかったじゃない！」

姉が拗ねるまで云い続けた台詞の数々は、余り役立ったとは云えなかった。所詮は夫婦間の問題に他人が、妹と雖も介入出来るものでは無かったのだ。

他人様の恋愛事情に首を突っ込む事勿れ。

私はひとつ学んだ。

姉に対する忠告は、子供が生まれるまで続いた。

毎日の様に、三十分ばかり日課と化した話し合いをしたが、実際に一片も進展を見せなかったのだ。

埒も無い。

生まれた猿の様な子供は春之と名付けられた。

小猿を見つめ乍ら、半年近くも私は姉に電話を掛け続けたのかと、妙に感心してしまった。

しょっちゅう里帰りをする姉なので、電話自体は毎日と云う訳では無いが、毎日毎日よく飽きもせず人の恋愛事に関わったものである。

る。

「これでは暇なオバさんですわね。」

私は小猿に向かって呟いていた。

そして、その行動をスッパリ止めたのである。

向こうから話題を提供されたのならともかく、そうでなくとも姉は喧嘩の度毎に帰って来るのだ、その度に話題となる夫婦の問題に、これ以上付き合うのも莫迦らしいと云うものだった。

私は根気強いが、無駄な行動は嫌いだった。

別れそうなら、それなりの手も打つが、この二人は相変わらず冷えた夫婦を演じている。

「大人って解らないわ。」

あの調子で、子供の前でも同様の態度で、まったくどうしようもない人達なのだ。

小猿が憐れで、時々子守がてら我が家に泊まらせるのだが、親がダメだと子供がしっかりする典型的なパターンで、中々良い子に育ち中である。

「弥也子さん。書庫に入っても良い？」

「良いわよ。読む本以外は触らないでね。」

小猿はハイ！と良い子のお返事をする。

この子も7才になった。あれから七年を経たとは、何とも感慨深いものが有る。子供とはあつという間に大きく成るものだとは私は知った。成る程、世の中に子離れ出来ない親が存在するのも道理であ

る。昨日まで赤ちゃんだったのに、と云う言葉は大人達の本音だったのだ。

そう云う私も１８才になるのだが、どうやらハタチ過ぎれば唯の人、と云うのは冗談では無かった。私は殆ど何も変わってないのだ。相変わらず大人達が解らない。友人達も解らない。つまり自分には他人が解らないのだと、私は知った。

理解しあうのは歩み寄りだ。しかし、そのつもりになっているか、そのように見えるだけってのが実際では無かるうか？

私は必要に応じて勉強して、中学に通う頃には既に大学課程は修めていたが、今更……と思いつつも学校に通い、やはり今更な大学部に行くだろう。

世の中って不思議だ。未だに私を天才扱いする人達が理解出来ない。

私はこんなにも物事を知らないのに……。

「弥也子さま。海島さまがいらつしゃいました。その前に、西園寺さまからお電話がございまして『１９時頃伺うので、夕食を一緒に』との事です。」

「……相変わらず一方的な人ねエ。」

頭痛を覚えた。

西園寺静。この人も解らない人では有る。

「まあ良いわ。省悟は居間かしら？」

「はい。」

静さんの事は後で良い。先ずは省悟の問題を片付けるべく、私は立ち上がった。

伝言を持って来た春加に、小猿を連れて来るように指図してから部屋を出た。

省悟は小猿の家庭教師なのだ。

最初は自分の時のように、それぞれの分野の教授陣を呼ぼうかと考えた私だったが、そこ迄の英才教育は必要ないと、小猿の親が云ったのである。とは云え、中途半端な勉強なら学校でも充分だろう。悩む私に省悟が提案したのだ。

「俺が見ようか？」

海島家を継ぐ為に、私以上の英才教育を受けた男である。気まぐれとは云え、頼もしい教師だ。

本当に良いのかと探る様に問うと、息抜きがてらに調度良いと宣った。有り難い事である。

自分で教えようとは考えなかった。

私は、実は子供が苦手なのである。自分が子供らしさと無縁だった所為か、子供にもつい手加減を忘れるのだ。

多分、私の教え方では、子供には理解が難しかろう。

省悟が長男で無かったなら、今も私たちは婚約者だったかも知れない。

幼い頃から気心の知れた友人は、中々粘り強く忍耐強く、尚且つ優しいと云う最高の人材でもあった。幼少時から、この私が虐めても虐めても、懲りずに泣かされに来ていたくらいだから、筋金入りだ。

気晴らしがてらに気まぐれに開始したとしても、余程の事が無ければ投げ出す事無く続けてくれるだろう。

そして狙い通り、4才の子供に付いた家庭教師は、未だ役目を投

げる事無く通つて来てくれる。

「悪いけど、勉強部屋は改装中なのよ。今日はこちらでやりましょ
うね。」

「やって下さいの間違いだろ？」

苦笑する省悟に首を振る。

「いいえ。私も付き合つわ。もうひとつ申し訳ないのだけど、今日は夕食をこ一緒に出来ないのよ。その代わりに……。」

この男は、私を好きだと云う。

子供の家教代金は、その日の夕食を共に摂る事なのだ。

二人の時間を90分。

それが約束。

小猿は自室でメイドに世話をされて一人で食べる。週に二度の事とは云え、せつかく私が家に居るのに可哀相かと思わないでもないや、最初は気付かなかったのだが、割と普通の子供は淋しがり屋だ。両親が居ない家で、大抵独りで食事をして、此処でも先生が来る日は独り。

母親がちよくちよく実家に戻るから、三人で食事をする事もあり、その時はとても喜んでいた。

因みに、父親と私の三人で食べた事もある。

その倅せそうな顔が教えてくれたのだ。

不満を云わないからといって、寂しくない訳ではないと。

自分が平気だったから気付かなかった己を少し責めたが……

何分にも私は、子供が苦手だ。そんなに世話好きとも云えないし、却って省悟の申し出は有り難くさえあった。

「何でって、訊いても良い？」

「静さんが来るらしいのよね。」

省悟の片眉が上がる。

「らしい？」

「そう。7時に来ると伝言を貰ったの。」

省悟は舌打ちした。

勝手な奴だなと呟いて。

「本当に、あんなのと結婚するのか？強引で無口で、無愛想だし目付きも悪い。君の話聞いていると、付き合いも一方的な約束ばかりじゃないか？」

「そう？でも誠実な方ではあるわよ。」

「…………。ああ云うのは、誠実とは云わないんだよ。」

省悟が脱力している。

そうかな？私は充分信頼に値する発言だったと思うけど。

「よし。勉強は7時からしよう。春之くんと食事一緒にしてから始めるから。」

「…………そう？」

それは初めての事でも無かった。

「そう。決まり。」

まあ良いけど。小猿も一人の食事より楽しかろう。

決まった所に小猿が来たので、話を伝えると何だか嬉しそうだった。

いつも独りにさせるのはこの男なのに、それでも嬉しいのだろうか？それだけ独りの食事は味気ないのだろうか？まあ、小猿は省悟にもよく懐いているから、単にその所為かも知れないのだけれど。

省悟は多分本当に良い夫になっただろう。彼との婚約解消は、素直に残念だったと云える。

しかし、静さんも充分に良い夫に成るだろうと、私は考えていた。確かに省悟の云う通り、多少は強引かも知れないが、害が有る程でもない。

その点で。

省悟と私の、静さんへの評価は大きな隔たりを生んでいた。

6話 私の婚約者？（前書き）

短いですがキリが良いのでm（・ー・）m

6話 私の婚約者？

その強引な男と出逢ったのは私が16才の時である。

5月6日。私は16才の誕生日を迎えた日に、父から婚約者の存在を聞かされたのである。

久しぶりに帰国して来たと思ったら、そういう魂胆が有ったのかと、三日前から滞在する父の思惑に納得した。

結婚相手を勝手に決められた事には然したる感慨は無いが、この家の後継となる男が、どんな人物かは気になった。

「どんな方ですか？」

「うん。有能だ。お前より7才年長になるかな？今年23才になる。」

「……………23才？随分お若いんですね。まさか新入社員ではあるまいし。」

呆れた私に、父は笑った。

「海外暮らしが10年。スキップして一流の大学も出ているよ。」

今時は海外も日本も無いだろうが、父は昔から海外、特に西洋の文化を好んだ。

確かに日本の上流階級は懐古趣味が強く、父には合わないかも知れなかった。

「それで、入社は？」

「三年前……かな？面白そうな男だったんで、全部の部所をたらい回しにしてやったんだが。オールマイティだったな。」

私は内心呻いた。

それで是非後継ぎに、となった訳だろう。

……しかし。断言するが、面白そうだと云うのが本音に違いあるまい。何の目的も無く、面白づくでした行動を、如何にも実はこの為だったと云って見せるのが私の父である。

上手く事が運んだから良いが、下手をすれば優秀な人材をダメにしかないではないか。

「ところで、私は出掛けるから。」

「？……お食事は？」

「西園寺さんと食べなさい。」

「……解りましたわ。」

最初からその積もりだったのだろう。悪戯盛りの子供ではあるまいに、人を驚かせたくて仕方のない人なのだ。いきなりの言動も、私は慣れてしまって動じる事さえ無い。

「16才だな。結婚を考える頃だろう。西園寺静くんという良い青年が居るから婚約しなさい。」

先程いきなり云われた時も。

「そう。どんな方ですか？」

あっさり応じた私である。多少の事で驚いていては、この父の娘

をやっていけないだろう。

父はションボリして出掛けていった。

二段階に渡って用意したビックリ箱が、両方不発に終わったのが哀しかったらしい。

「世話の焼ける人ねえ。」

私は苦笑して見送った。

驚いてあげられるなら手っ取り早いのだが、如何せん彼は「振り」をするともっと拗ねるのだ。

何故か気付く父の眸は中々に鋭いのである。

そして。

父娘の為の私のバースデイ料理は、婚約者の顔合わせの場となった。

先ず、彼の容姿に私はポイントを20点加算した。

あれでもかなりの目利きなので、特に仕事面での人物評価は信頼出来る父である。故に、後日確認するとしても、取り敢えず仕事の方も20点。

総合100点満点の人物評価だが、今の所はパーフェクトだ。

美形なのは有り難い。

鑑賞に耐える顔は、毎日顔を合わせる可能性を持つ相手だから、素直に嬉しい。

多少喜怒哀楽に欠ける様だし、通常表情が不機嫌そうだが、特に気にならない。

鋭い目付きも気に入った。

きつと子供も可愛いだろう。私に似ても、彼に似ても。

食事の最中に彼は云った。

「浮気は構いませんが、世間体には気を使って下さい。」

世間体を気にするのも良い事だ。つまり彼も対外的には仲の良い夫婦を演じる積もりな訳だ。

「はい。つまりそちらも、気を使って戴けるのですわね？」

「……………どういう意味ですか？」

見下した様な眸付きは、彼がするから許される。傲慢な表情が板についていて、上流階級に入っても充分にやって行ける人だと思った。プラス5ポイント。

「笑い者になるような、派手な遊び方はなさらないでしょう？」

「浮気と云うものは、余り他人に見せるものでは無いでしょう。」

中々宜しい。

けれど問題は。

「ひとつお願いですけど…………と云うより。先に申し上げておきますが、お子様が出来た場合には、養育費のみの支給にして戴きますわ。」

「子供？」

「はい。塩野の後継は私が生みますので。」

これだけは弁えていて欲しいのだ。入婿の子に塩野の跡は継がせられない。塩野の血を継ぐ者でなければ。

「もし私に生めない時は、親戚から養子をとります。」

キツパリと宣言した。

男は嗤った。

「なるほど。産ませるのは構わないが認知は許さないと。」

「はい。うちで引き取るのも構いませんが、財は渡せません。」

「引き取る？随分気前が良い事で。」

気前が良い？

跡を継がせず、財産分与も許さないと云うのに？

この人は分を弁えている。プラス20ポイント。

「では私からも云っておく。」

「はい。」

「他の男の子供は生まないで戴きたい。」

見下しように云われた。

「当然ですわ。それが契約と云うものですもの。」

そう。

男の浮気と女の浮気は違う。

女の浮気は見苦しいと、私は考えるタイプなのだ。

他人様の目は男の浮気には寛容だが、女の浮気には厳しいものだ。

私はそんな事で自分の価値を下げる気は無かった。

7話 元婚約者

あの日、帰宅した父は云った。

私が婚約了承を伝えれば、勝ち誇る様子だった。

「弥也子。はしゃいでも良いんだぞ？」

「………どんな理由で？」

ニヤリと父は笑った。

「だって、弥也子は西園寺くんみたいな男がタイプだろ？嬉しいだろう？西園寺くんと婚約出来て。」

私は、父の自分は何でも解ってるんだ……と云う顔が好きでは無い。

出逢ったばかりで、好きも嫌いも有りはしない。

それはまあ、多少好ましい外見をしているとは思うが、だからって採点が甘くなりはいしないのだ。

多分。

現時点での、彼に加算された点数は65点。別に悪い点数でも無い。いや、正直に云うなら完璧に近い。

後は性格その他になるが、特に問題点も見られなかったし、プラスはしてもマイナスは無いだろう。

それが省悟には不満な様である。

「俺と婚約してた時は何点だったの？」

「100点。」

「……ホントに？」

虚を衝かれた様に、省悟は眸を瞠った。

別に嘘は云わない。先ず、既に英才教育を受けている点で「可」優秀だと聞いたから「良」父親の仕事を学びがてら手伝っているが、中々ソツがないと評判で「優」となり、仕事面では20ポイント。生活も同水準の育ちで不安も無いし、私を愛してもいる様だし、気心も知れているから20ポイント。

性格も時に強引とも云えるが、私的な問題では割と穏やかな所も良いと思う。何より私に対しては常に譲ってくれるから、20ポイント。

容姿も良い。きっと綺麗な子供が生まれるだろう。優しい綺麗な顔立ちは、私の好みは別として、高評価ではある。20ポイント。

体力も有る。健康だし健全だ。素行にも問題点は無い。

マイナスなし、プラスのみで100点。

もちろん浮気の問題も考えた。絶対しないとの自己申告は信じ難いが、塩野の財に手を付けないと云う念書を貰う約束を交わした。彼自身の財産も多少持つて来るだろうし、自分の分をどうしようと構わないから、その辺は心配無かった。おまけに本当に浮気をしなかったり、しても「お金の掛かる女性」では無ければ、塩野家が潤うだけの話だ。中々宜しい。

しかし。

彼が長男で有っても尚、縁談が進められたのは、彼に弟がいたからだ。

その弟の存在が消えれば、私達の婚約は解消されざるを得なかった。

た。

姉が他家に嫁いでいるからには、塩野家は私が継がなくてはならない。少しばかり寂しいけれど、仕方の無い事では有った。

「弥也子はさ、俺と結婚したいと思った事は無いよね。」

「……何故？」

「婚約してた期間は4年もあったのに、君が俺を好きだとか云った事もないだろ？」

苦い笑みに、私は眉を寄せた。

そう……だったろうか？

けれど誤解だ。私は省悟が好きだった。

「でも、好きだったわ。省悟が私の事を好きでいてくれるのを知っている様に、私が省悟を好きなのも、あなたは知っていると思っていたから……。」

わざわざ云う必要を感じなかった。

だいたい、愛せるかも知れないと思わなければ、どんなメリットも意味は無い。省悟に対して、愛情を育てる事を無理だと考えたならば、私は婚約などを承しなかったろう。

そこは、大前提と云うもので、わざわざ言葉にする迄も無い話だと私は理解していた。

確かに、どんなに深く愛する人が出来たとしても、塩野の役に立たない相手なら結婚など出来はしない。

それは立场上、私にも責任が有るから仕方ない話だ。

だからと云って、条件だけで結婚など考えられる訳も無いだろう。

省悟は私を何だと思っているのか。

正直、腹立ちを覚えたが。

「ホントに？俺を好き？」

縋る様な眸に、うろたえてしまう。

「好きよ？」

応え乍ら、どうしようかと思った。そりゃあ立腹もしたが……
そんなに、大きな問題だろうか？私達は良い友人だと思っていたし、
それなりに理解し合えると感じていたのだが。

……何だか、今の省悟は少し怖い。
いや。多分。恋……なんてものを、省悟がしているから、理解出
来ないのだ。

姉も義兄も友人も。恋愛に関する問題に出逢った途端に、私の理
解を超える言動に走る。

私は恋をした事が無いから……だから、解らないのだろうか？
悩む私の手が省悟の手に握りこまれ、そっと口元に運ばれた。

祈る仕種で手の平にキスをされた。

やはり、理解出来ない。

「11才の時だったよね。俺はずっと、君を追い掛けまわしていた。」

「そうねえ。泣き乍ら、追い掛けて来たわね。」

思い出は微笑ましい。

小学生の時、私は共学の風ヶ泉に通っていた。美晴ヶ峰女学園に

移ったのは中部部からである。

ヶ峰は小等部までが全寮制なので、いくら嫁入り道具として名高いお嬢様学校でも行くのは難しかったのだ。

同様の理由で、省悟の両親が選んだ学校も、寄付さえ納めれば融通の利く私立校だった。

つまり同じ小学校だ。

その学校は中部部からは成績がものを云う学校で、試験の点数さえ良ければ出席を煩く云われる事も無い。

それはちよつと魅力的だが、実はヶ峰も似た様なものだった。

だが、そうで無くとも風ヶ泉学園にそのまま進学する事は選択しなかったろう。学力の高さと同じくらい、素行の派手さで有名な学校は、嫁入り前の娘には相応しいとは云えないからだ。

成績が良ければ出席に融通が利くのは同じだが、ヶ峰に在籍するのは名誉とされた。良家のお嬢様且つ汚れなき乙女の証明にもなるのだ。

「君が、中学に上がれば別々だとか云うから、俺はいつも以上に泣いちゃってさ。」

そんな事も有った。

確か、5年生の時だったろうか？私はまだ10才だったから、4月の半ばから5月になるやならずの事だったろう。

「家に帰った俺は、泣いて親に訴えたよ。『弥也子ちゃんと婚約したい！』って。」

「……何でまた。」

当時の口調を繰り返したのか、裏声で云ってみせた省悟に、私は呆れた。

随分と飛躍した話だった。

省悟は肩を竦めて、自嘲するかの様に笑った。

それは、婚約解消して以来……省悟が覚えた表情だった。
以前はもっと、明るい眼差しの人だったのに。

「そうすれば、また逢えるだろう？結婚したら、いつも一緒に居られるって思った。」

それで、この男の親はわざわざ長男を婿になどやろうとしたのか。
いや、我が家としても良い縁談だとは思ったが。

「雅志が居たし。弟が居れば、俺が居なくなっても許されると思った。それに、君の家と繋がりを持ちたいと、父さんが云ってたのを覚えてたしね。」

「ふうん。そう云う事だったのねえ。」

感情的な癖に、大人より智恵が回る子供だった省悟である。この両親はさぞかし振り回された事だろう。

私と同じく、親の思惑に頷いただけかと思っていたが、まさか省悟が云い出した張本人だったとは。驚く事もあるものだ。

「週に二回。逢う約束も俺が云い出した。」

「そうなの？」

仲良くさせる為に、等と云う名目で、週に二度開かれた子供たち二人だけの夕食会。そんなものまで省悟の画策した事だったのか。そもそも、婚約を解消して間もなくの時、家庭教師の話が出たのも、この時間が有った為だった。そのまま、夕食会の時間を流用してくれないものかと考えたのである。案の定、省悟は自分から申し出てくれた。私との90分が有るにせよ、全部で前と同程度の時間

だから、省悟の負担にもなるまいと考えていたのは確かである。

「俺は本気だった。子供の思い込みなんかじゃない。今でも本気だ。」

「…………でも、もうダメよ？」

そう。

私は、他の男と婚約したのだから。

「12才の時、初めて君にキスをした。覚えてる？」

「…………ええ。」

この会話の流れを、私はどう取れば良いのだろう。

躊躇いつつ頷けば、そつと引き寄せられて、省悟の手の平が、私の頬を包んだ。

この縋る様な眸が好きだった。

私に執着してやめぬ、省悟の気持ちは理解出来ないが、嫌では無かった。

いつか、理解するかも知れないとも思った。

理解出来ないままでも、恋など知らないままでも、省悟を好きな事に違いは無いから…………問題は無いと考えていた。

ゆっくりと口付けられた。

うつかり、思い出が過ぎり抵抗を忘れた。

困った…………と思う。

別に嫌悪感はない。

けれど、結婚を前提としていた故に許していた3年間とは違う。

実際には3年にも満たない期間だったけれど…………。

もう一度触れて、舌先が齒列を割る。
婚約を解消してからは初めての口付けだが、逢う度のそれが執拗なまでに深いものだったと覚えている。

それは不味いだろう。
いや。

こんな、触れるだけのキスだって、不味いには違いないのだ。
ゆっくりと押し退けると、省悟は素直に従ってくれた。

「私は……浮気などする気は無いのよ。」

そう告げて、困った様に笑んで見せた。
彼は私の笑顔に弱い。笑って見せれば、多分彼が逆らう事など何もないだろうと、私は知っている。
苦しそくに、省悟は云う。

「俺を……揶揄ってる？」

「いいえ。あなたが好きよ。大切な……友人だと思っわ。」

それは事実でしか無いが、この場では少しばかりの飾りつけが必要だろう。

省悟を、敵に回す気は無かった。

「友人？」

苦しみが憎しみに、切なさが嘲笑に変わる前に、私は意識して泣きそふな表情を作った。

省悟が戸惑うのが判る。

私は、こんな事も出来るのだ。多分、省悟に愛される価値など無いだろう。

そんな事も知らず、省悟は私を食い入る様に視つめた。

泪を浮かべて、それでも口元に笑みをはく私は、省悟の視線にも揺らぐ事は無かった。

「そうよ。友人なら……ずっと、一緒に居られるでしょう？」

「……それで？それである時、家庭教師の話を俺にしたのか？」

そうかも知れない。

友人としての彼は得難い。望む想いは返せなかったが、それでも好意に嘘は無い。もう、毎週逢う事が無いのかと……少し、淋しかった。

私は、多分酷い事をしている。

「弥也子。俺……お前が好きだ。」

泣きそうな声に、私は頷きを返した。

「私も。」

何て、イヤな女だろう。

「お前以外、誰も要らないんだ。」
「うん。」

抱きしめられて、泪が零れた。
私に、泣く資格など無いのに。

それでも、厚顔にも続けた。

「大切な……親友なものね。」

「そうだな。」

省悟が、無理をして笑ったのが解った。

「大切な……一生の友達なものな。」

何故だか、私は涙が止まらなかった。

省悟が可哀相だったからかも知れない。

私なんかを、いつまでも忘れずにいて、いつまでも利用されて、可哀相だったからだ。

別に、こんなのは演技に過ぎないのに、省悟はずっと、背中を撫でてくれた。

私は、この人を愛したら、多分倖せだったろうな。

優しい手の感触に、私は思ったが、そんな想像も、これが最後だと思う。

省悟との別れは、私が選択した事では無いが、静さんを選んだのは私だった。

父が見つけて来た男達の中で、私は静さんだけを選んだのだ。

だから……この手に絶る資格など、私に有る訳も無いのだ。

そう考えるのに、私の泪は中々云う事を聞かず、省悟の手はずっと私を慰めた。

8話 静さんの苛立ち

省悟は結局、あの後帰ってしまった。

明日にしてくれと云われて、私は頷くしかなかった。小猿はちょっぴり寂しそうだった。

彼があんな風に取り乱した姿を見た事は無い。

それもこれも私の所為だ。

あの人は何処までも私に甘かったから、向けられた怒りと憎しみに一瞬とは云え、怯む自分を感じた。

海島家を敵に回したく無いのは事実だが、多分それは云い訳に過ぎない。

私が怯えたのは、彼の一途な愛情が失われるかも知れないという、その一事に対してだった。

既に手放した筈の倖せを、私は逃さぬ為に謀った。
自己嫌悪に陥らずには居れない。

——私って卑劣。しかも卑怯。欲張り。独占欲の塊。

うんざりしてしまう。

いつか愛せるだろうと、思っていた相手。つまり、まだ愛してはいなかった相手。

どんなに好きでも、恋愛感情など欠片も抱かなかった相手だ。

キスしかした事が無いのは、私が持つ頑なな貞操観念よりも相手の激情に対する戸惑いの方が、拒否の理由としては強かったかも知

れない。

「何処が良いのかしら。こんな女。」

どう考えてもイヤな女だ。

しかも、私は喜んでさえいる。

これで、また暫くは省悟の心は私に縛られるだろう。歓喜し笑う、自分の心を自覚する。

私の独白を聞こえなかった振りをして、由紀は髪を編み込んだ。バックは長く垂らしたまま、サイドの一部を編み、髪飾りの様に巻き付けた。

「如何でしょう?」

「良いんじゃない?」

別にどうでも良かった。

鏡の中の私は、淡い色のワンピースを着て、文句なしの美少女だ。清楚なお嬢様にしか見えまい。

一応点検して、私は嘆息して立ち上がった。

もうじき、婚約者どのの来る時間だった。

——気付かなければ良いのに。

彼には知られたく無いと、無意識に思う自分がいる。性悪な私を。

彼が気付かなければ良いと願う。

——何も知らない純真な娘だと、そう思ってくれないかしら?

流石に、それを演じるのは遅すぎると、気付いてはいたが。

恋をした事は無い。

けれど。

目の前に立つ良い男に、愛されるのは気分が良い。

私は独占欲の塊で、ついでに云うなら面食いだ。

どう考えても、誉められた性質では無く。誉められる要素に欠けた性格でもあるだろう。

「パーティーの進行も、全て決まりましたよ。」

「はい。」

既に執事長から報告を受けていたが、私は頷くに留めた。我が家に代々勤めあげる執事の家生まれた彼は、最近になって父親からその職務を受け継いだばかりだが、中々よくやってくれている。

招待状の殆どは彼の手によるものだ。

もちろん静さんだって、私が何も知らされてない等とは思えない。しかし、彼は探る様な眸で私を見る。

「本当に良いのか？後戻りは出来ませんよ。」

「……？はい。」

静さんは言葉も態度も常に微妙だ。いや、はっきりとした口調であり、態度なのだが。

敬意と怒りが混在すると云うか。

丁寧と不遜が行き来すると云うか。

探る様な、疑う様な、氣遣う様な、優しかったり、いきなりソッポ向いたり、忙しい人なのだ。

——後戻り……ねえ。

別にそんな事をするつもりは無いし、必要性も感じない。何故そんな事を聞くのか？ 考えると、正直頭が痛い。

私が問う様な視線を向ければ、彼は不機嫌そうに眉を寄せた。省悟は無表情だと云うけれど、彼の感情の流れはその僅かに動く表情で判別出来た。

ただ。何故そう思うのかが、解らない。
最初からそうだったけれど。

彼は、私がこの結婚を嫌がっていると考えている様なのだ。

「今日は金曜だ。海島の後継ぎが来ていたのでしょうか？」

淡々とした物云いだが、吐き出す様に紡がれた言葉だと感じた。
省悟の事を嫌いなのだろうか？

だが、省悟に対しての態度もやはり一定しないので、私は結局結論には至らないのだが。

この人は情緒不安定なのかと、最初は考えたくらいだ。調べたら仕事等では冷静沈着な態度を貫いてたから安心したものだ。

——二度目の婚約解消は外聞が悪いものね。

そんな事を思い出しつつ、私は応えた。

「ええ。けれど明日にするそうですわ。」

「勉強を？」

嘲る口調。

怒りに満ちた眼差しが刺す。

「ええ。」

「ならば貴女には関係が無い。」

「はい。」

「今度ゆつくり旅行でもと云ったのを覚えてますか？」

私は瞬いた。冷え冷えとした口調で語る話題とも思えなかった。

「ええ。」

「会長から別荘の鍵を預りました。今夜出ます。」

やはり冷たい口調で続けられたが、もはや戸惑う事も無い。

「はい。」

「……………っ。」

私は承諾しただけなのに、何故こんなに怒るのだろう。

しかし、こうして怒りを耐える姿は、同時に哀しみもまた耐える
と私は知る。

それが、とても。

楽しい。

私は彼のこんな表情がとても好きだ。ドキドキすると云っても良
い。

昔から、私は好みの男の子を苛むのが楽しかった。この年まで続
ける積もりも無かったが、仕方あるまい。私の性^{さが}だ。

彼が私の言葉と態度に怒り苦しみ哀しむ姿。

ドキドキする。

何故怒るのか、何故哀しむのか、ドキドキして理由の追求を忘れてしまう。

静さんは、とても綺麗な男性だ。鋭い眼差し通った鼻筋引き結ばれた口元。

端正とも端麗とも呼べる、煌めく容姿の持ち主である。

最初は査定の邪魔になるから自重したが、後は別に後日で構わないし、最近は心置きなく見惚れている。

省悟のキラキラとはまた違うキラキラだ。

私は綺麗な鋭い顔立ちが大好きだ。省悟も最近はそうなりつつ有る。いや、省悟の場合は鋭いよりキツイと云うか、冷たい感じだけ。しかも若さの所為か多少線が柔らかかで美少女じみてるけど。

その点、静さんはパーフェクト。不機嫌な表情が非常によく似合う理想のキラキラです。

——いや。アレは別。

うつかりキラキラ代表みたいな人を思い出してしまった。
過ぎたるは猶及ばざるが如し。うん。

それに、外見なんて飽くまでも、二次的な条件ですからね。

………これだけ語って云う台詞でも無いけど。

食事を終えた途端、すぐに出発すると云うので多少驚いたが、頷いて手配を命じた。

何人かが同行する為に、私の荷造り以外にも慌ただしく働いていたが、静さんは二人で行くと云う。

別荘が居るから同行者は必要無いと云うのが、静さんの云い分であつた。

私が今までで一番、戸惑つた台詞だつた。

9話 静さんの嘲笑

別に構わないが、……やはり私がお風呂を沸かしたりするのかしら？

料理も？どうやって？

こんなに困ったのは久々の事態である。

私は移動中の車内で、ずっと黙り込んでいた。

しかし杞憂だった。

到着は夜中になったが、別荘番の安村夫妻が気を利かせて入浴の準備を整えてくれていた。

いきなりの訪問だったにも関わらず、掃除が行き届いていた事にも、私は満足した。

「明日の朝食も頼めるかしら？」

「勿論でございます。」

安村夫人の返答に私はとても安堵したが。

「材料は揃っている。必要ない。」

彼は冷蔵庫を覗いて、そんな事を云った。

おまけに。

「日曜の夜まで滞在するが、その間は来なくて良い。」

等と続けた。

私は呆然として、言葉も無かった。

どんな嫌がらせかと思った。

安村夫妻が帰った後、私は尋かすにおれなかった。

「あの……私が……作るんですの？」

「作れるのか？」

「……いえ。」

「なら云わない事です。心配しなくても私が作る。」

侮蔑の眼差しが痛かった。

どうせ家事ひとつ出来ない女だ。

否定はしない。しないが。

ムカついた。

しかしここで反論しても、自分の無能に恥を上書きするだけだ。ぐつと堪えて、私は感心した様に云った。

「まあ。お料理が出来るんですの？」

「ええ。庶民の出ですのね。」

なんてイヤミな男だろう。卑下する振りで、特権階級を莫迦にしている。

自分もじきに仲間入りする癖に。

ムカムカし乍らシャワーを浴びたが、ガウンを羽織って出たところで、足が止まった。

「長湯ですね。待ちくたびれた。」

ブランデーグラスを傾け乍ら、彼が嗤った。

口元に浮かぶ微かに笑みは、友好的とは言い難い。

何の為に待っていたかは訊かなかった。尋ねる迄もない事だった。

招待状の返事も総て届いた。来月には彼の妻になる。今そうなつても、非難する者はいないだろう。

私はそう考えつつ、彼の許に足を向けた。

一步。

歩を進める毎に、戸惑いが胸を掠める。

息が止まりそうだと感じる。

恐れるつもりなど無かったが、やはり少し怖いのかも知れない。

——何が怖いのかしら？

説明し難い抵抗感を覚えて、自分自身に問い掛けた。

「嫌そうですね。」

嘲笑されるのも無理はない。

私の怯えを嗅ぎとったのだろう。プライドが頭を擡げ、私は恐怖を抑え込んだ。

差し出された手を取って、寝室に向かう。

傲然と顔を上げ。けれどやはり恐ろしかった。

これは多分、未知への恐怖と云うものだ。花嫁養成学校と呼ばれるだけあって、ヶ峰には婚約者がいる女性はや元より、籍をいれた生徒さえ存在した。彼女達の話題の中に、初夜への不安を訴えるものがあった。

正直云うなら、内心莫迦にしていたが、これは確かに怖い。理屈ではないのだ。

口付けは乱暴だった。

そして執拗だった。

餓えと渴きを癒す様に、貪る様なキスだと思った。

触れてくる手も同じ。

しつこくて、優しさの欠片も無かった。

確かに求められているのに、同時に憎まれているのを感じた。

それは、少し哀しかった。

痛みに引き裂かれて私は泣いたけれど、もしかしてそれは快樂の
所為かも知れない。

容赦のない責めは、初めてなのに、私に声を上げさせた。感じず
にはおれない、執拗な愛撫だった。

泣き乍ら………私はいつの間にか眠っていた。

父から見た娘 1 やはり愛らしい天使（前書き）

サイドストーリーです。

弥也子の最初の婚約が破棄されるまでを、父親目線で語ります。

父から見た娘1 やはり愛らしい天使

小賢しいのはイケない。賢しいと云われるのも微妙だ。賢いなら良いが……他人の娘を小賢しいだの賢しいだの云う訳も無くて、その総てを引つくるめて、賢いと云われるだろう。

とは云え、うちの娘は本当に賛美されている。賢くて愛らしい、天使のような娘だと云われる。

私は人を見る目には自信が有る。どうやら彼らは本気で云っているを見る。

さて。

私には娘が二人居るが、最初の娘を政略結婚の道具として、下の娘を残したのに他意は無かった。

最初は単に、私自身が未だ若く、跡取りの事を考える気にならなかったただだった。

もちろん、殆どの人が納得していた。だが、そう受け取らない向きも有り、『下のお嬢さんの将来が楽しみだ』だの『やはり』だの云われれば、多少は意識をする。

そもそもは上の娘が中々評判の良い娘だったのだが、それよりも評価されたのが6つや7つの幼児と云うのは如何がなものか？

上の娘は、私から見れば後継ぎには出来ないが、子供に負ける様

な出来の悪い娘では無い。

親莫迦なのだろうか…………。

更に親莫迦と云われそうだが、下の娘は、しかし他人から見ても天使の様なと云われる娘だ。

それは、ふらふらと惹かれ、褒め讃える気持ちも解らなくは無いくらい可愛いのである。

他人が讃えるからには、これは親莫迦では無いだろう。

首を傾げてキョトンとした顔は絶品。

真っ直ぐこちらを見上げて、ニツコリと笑顔を見せる様は目眩がする程の愛らしさ。

そんな顔でお強請り^{ねだ}などされようものなら、何でも叶えてやりたい。

世界一可愛い娘だった。

だから、まあ、その延長かな…………と思わないでも無かったのだが、調度その頃、少しばかり娘を見る目が変わる会話が有ったばかりで。

少し…………試して見ようか。と、そう思ったのだ。

「加那子は結婚を嫌がってたか？」

娘達は歳が離れている割に仲が良く、何でも話し合う。だから弥也子に探りを入れたのだが。

「ええ。でも大丈夫ですわ。姉さまは結局の所、お父さまに逆らう事は有りませんもの。」

大きなウサギのヌイグルミを抱いた娘は、どちらが愛玩の対象か判らないくらい愛らしい。

だが口にされる言葉は微妙な気がする。

大人びた台詞を時々口にする娘ではあったが、深く考えた事は無かった。

子供は大人の真似をするものだからだ。
話を突き詰める必要も感じた事は無かったし、弥也子も特に続けないから気付かなかった。

「『姉さまは』って事は、弥也子は？」

追求してみたのは、周囲の高評価が、子供にはそぐわないものだと確認する為だったかも知れない。

「……？」

キョトンと、弥也子はこちらを見上げた。
やっぱり稚^{いとけな}い可愛いだけの娘だと思った。

「違うのかな？」

「私は、自分が納得出来ない事なら従いませんから。」

「……ええと。パパのお願いでもかな？」

「はい。」

いやいや。ドラマとかで、この手の台詞はよく使われる。

これだけで天才だ何だと騒いだら、私は本当の親莫迦になつてしまつたろう。

少し考えた。

「でも加那子が嫁に行けば、弥也子のお婿さんがこの家を継ぐんだよ？」

「承知してますわ。」

言葉遣いは、この際考慮から外そう。これは母親べつたりの娘だから、影響が強いのだらうと思う。

「お婿さんはパパが選ぶんだが、弥也子が好きになれるかどうかよ、会社や家の事をパパは考えるよ？」

「はい。」

弥也子は何でそんな事を云うのか解らない。とばかりに首を傾げた。

「難しいかな？」

寧ろ微笑ましい気持ちで、私は弥也子の前にしゃがみ込んだ。

「いえ。そんな当然の事を、何故仰有るのかと思いましたので。」

「……当然？」

「はい。好悪の情より、家の役に立つ方を優先するのは、当然ですよ？」

小さな頭に延ばした手が止まった。

いや。まだ判らない。

私はジッと弥也子の大きな眸を視つめた。

特に気負うでも無く、当たり前のように云われた台詞は、不思議そうな表情で愛らしく視つめてくる子供に似合うものでは無い。

「では加那子の結婚相手について、弥也子はどう考える？」

「良いご縁かと。」

参ったな。

大人ぶっているのか、本当に傑物なのか区別が付かないぞ。

「加那子の……恋人と比べると？」

弥也子は困惑を眸に宿した。

「元、恋人さんは、塩野の役に立つ方では有りませんから……考慮の対象に値しないと考えますが？」

はい。全くその通り。

困ったな……もしかして、本当にうちの娘は特別なのかも知れない。

いや。まだ母親の言葉を繰り返している可能性も有る。

「弥也子は……自分のお婿さんは、どんな人が良いと思う？」

「……………」

弥也子は微妙な表情をした。

言葉にするなら、何故今日に限ってこんなに質問責めにされるのか解らない…………と云う顔だろうか？

うん。パパにも解らん。

弥也子は子供らしからぬ溜め息を零した。

「才能が有るに越した事は有りませんけれど……一番大切なのは。」
「大切なのは？」

弥也子は首を傾げた。

「分を弁えた方……でしょうか？」

「分？」

「はい。婿である分を弁えた方。例えば、塩野の力や財を自分の物だと勘違いしない……等の。」

「……………それは、大切だね。」

「はい。大切です。」

愛らしい我が家の天使が、私の中で、ほんの少し姿を変えた瞬間だった。

「弥也子は、嫌いな相手でも……家の為に結婚するんだ？」

しかし、その質問には、軽蔑の眼差しが返された。

「愛せるかどうかは、大前提かと思えますけれど？そんな考えですから、浮気など繰り返して家庭に不和を呼ぶのですわ。」

加那子からは浮気な父親を軽蔑して、散々詰る言葉や態度を向けられたが、弥也子からのそれは初めてだった。

「そうか……大前提か。」

私が呆然と頷けば、弥也子は嘆息して仕方ないとばかりに僅かな笑みを、唇に浮かべた。

「お父さまも、大変でしょうけれど、努力が不足していたと認めるべきですわ。……いつか、倅せになる為に、次は間違えない為に、必要でしてよ？」

娘は、母親べつたりの癖に、母親にも否があると認める様だった。母親べつたりの癖に、『次』の可能性を否定しなかった。

母親そつくり微笑して、母親そつくり理路整然と冷めた言葉を使う娘。

だが、母親とは全く違い、娘は『愛情』を有って当たり前、『大前提』だと云う。

母親とは違い、娘は私にも優しい言葉をくれた。

母親と同じ顔で、同じ聡明さで、『情』を否定したあの女とは、真逆の言葉を操る娘。

その母親が永く側に居られないと、理解している娘。

私は、何故だか少し……泣きたくなって、誤魔化す様に、弥也子を抱きしめた。

娘はスキンシップが嫌いな様で、多少抵抗したが諦めたように私の腕を宥めるように叩いた。

「男が簡単に泣くものではありません。」

「パパは泣いてません。」

「そうね。ちょっと混乱なさってるだけですわね。」

揶揄う様に、けれど優しい声で云う。それが幼いとさえ呼べる娘から発せられた事を……私は、どう受け止めるべきだろう。

だから、だろうか？
私は試した。

あの会話が有った日は、まだ確信した訳でも無かった。
小さな子供が、大人の真似をした。それにまんまと踊らされた、
莫迦な父親役を私は演じたのかも知れない……と、そんな風にも思
ったものだ。

足掻いた、と云っても良い。

未だ小さな幼い娘。
可愛いだけの、私だけの、愛らしい天使だと思いたかった。

上の娘が嫁ぎ、暫くして。妻が亡くなった。
若く見えても、実はかなり年上だったし、そんなに永く生きたい
と考えてくれる女性でも無かったから……仕方ない。そう私は考
えた。

延命を望まない妻を、恨めしく感じた事も有るが、こればかりは
強制出来る訳もない。

弥也子が7才になって間もない頃だった。

妻は人間嫌いの気も有り、殆ど自室に籠っていたが、娘となら対
話を楽しんだ。

メイド頭と執事長は永く妻に仕えた事も有り、他にも数名の氣に
入りの使用人が妻の部屋に出入りを許されていた。

一番、妻から……その部屋以上に「心」から閉め出されていたのは、多分私なのだろう。

妻は聡明な女だったから、出入りする使用人とのやり取りで充分に家の采配を熟した。

私が手出しする事は許されていなかった……と云っても良い。

だが、妻が亡くなった後は、私と娘しか主は居ない。

上の娘が嫁いだからには、私と才の幼い娘のみである。

当然の様に、執事に指示を仰がれたが、戸惑ってしまった。

妻が、手出しを望まなかった事を考えると、家の事に口出しするのは躊躇われたのだ。

だから、なのだろうか？

試した、と云うのは口実で、逃げ出した……とも云える。

妻の記憶、気配が色濃く残る屋敷から。

どうせ、才の娘には何ほどの事も出来まい。

高を括り。

だが、もしかして……とも思い。

「家の事なら娘に聞け。私には今まで通り、定時報告だけで良い。」

実際には、執事長とメイド頭の二人が、万事良い様に計らうだろう……と、そう考えて下した命令でも有った。

だが。

使用人達は、新しい女主人として、弥也子を受け入れた。しかも嬉々として。

当たり前のように、弥也子を敬愛する様子には呆れたと云っても良いだろう。

生まれた時から仕える主家の娘だ。愛情が湧くにしろ、多少は子供に対する侮りが残ってもおかしくは無い。と云うより、寧ろそれが普通の筈だった。

だが、弥也子は侮られるどころか、下手をしたら母親よりも女主人として頼りにされたのだ。

私はその後、会社の経営について、大きなプロジェクトの問題について、様々な課題を弥也子に与えた。

結果は、家の采配と同じだった。

財務の責任者で、私の片腕とも云える女性は、当たり前のように弥也子に膝を折った。

どうしてもツテが見付からなかった、財界の大物は取引の相手に我社を選択し、その理由に弥也子の名前を出してくる始末だった。

「どこで知り合ったんだ？」

問えば、困った様に微笑して。

「ご紹介を戴く機会がございました。」

と、明言を避けた娘は、未だ10才だった。

最初の縁談が来た時には、既に弥也子に対する信頼は確立されていた。

認める迄の私は。

例えば。

「まだまだだな！」

とか。

勝ち誇って出ていくタイミングを、いつも伺っていたように思う。小賢しい事を云つても所詮は子供だ……と、しらしめ窘めようとする気持ちだが、常に付き纏っていた。

結果は、正反対のものとなり、私は認めざるを得ないと知ったのだ。

この娘に「小賢しい」などと云えば、多分弥也子は殊勝に謝罪さえするだろう。

生意気な態度を詫びて。

そして？

私を「ソレマデの人間」と見做すのだろう。

それは余りに情けない。

愛する娘が、愛らしいばかりでは無いと認めた方がマシだった。

娘のツテの方が、私自身のそれより巨大なもの、頼もしい限りではないか。

どんな才能を持ち、子供らしさに欠ける娘であつても、その愛らしい仕種が、実は計算されたものだったとしても。

愛する娘には違いない。

少しばかり寂しい話だが、私は有能な娘に満足もしていたのだ。

それに、娘は有能なだけでも無い。

多少判り難いが、愛情深い優しい娘だった。

それは父親として、誇つても親莫迦ではないだろう。

……… 多分。

父から見た娘2 娘の淡い初恋

「海島の総領がお前と結婚したいそうだが、どうする?」

弥也子は一瞬、眸を睜った。そのままゆっくりと瞬きをして、微笑した。

「海島家は、御次男に後を継がせると?」

「ああ。」

流石に理解が早い。

感心するより呆れてしまった。

しかも、それは海島の長男がどれほど弥也子に執着しているかを、自覚している証でも有る。

「わざと……惚れさせたのか?」

「まさか。それこそ次男なら考慮の余地はございますけれど、跡取りに興味を持つても意味がありません。」

11才の娘に云う台詞では無かったが、当の娘は気にした風もなく応じた。

そして、実際には「意味」が有った事に苦笑して見せた。

「海島も思い切ったものですわね。アチラのご当主夫妻は、そう御若い訳でも無いでしょうに。」

「まあなあ。だが、今はともかく、直に塩野は海島を凌ぐ。それを考えれば悪くない話だと計算したんだろ?」

弥也子は少し思案する眼差しだったが、うすく笑って頷いた。

「そう。確かに悪くない話ですわ。こちらにとっても。」

「海島の息子は出来が良いと云うが、実際はどうなんだ？」

弥也子は愛らしく首を傾げた。

「そう。確かに出来は良い様子ですわね。精神年齢も高く、周囲が莫迦に見えて仕方ないでしょうに、天狗にも成らずに子供達と遊んでやっている……と云う印象ですわ。」

「……………お前が云う台詞じゃ無いがな。」

弥也子はニツコリと笑った。

相変わらず天使の様だと思わずにいられない笑顔で、コロコロと笑声を上げる。

高く澄んだ笑い声は、無邪気で愛らしいとしか云い様が無いのだが。

口にする台詞は相変わらずだった。

「似た者同士と申し上げるべきかしら。ある程度は本音で付き合えますし、気楽では有りますわね。」

「ふうん。で？好きか？」

その質問には明瞭な解答は得られなかった。

「さあ。考えた事もございませんけれど。恋の類いの感情なら、正直理解出来ないとしたか……………」

「恋は解らないか？」

弥也子はコックリと頷いた。

あどけない仕種だが、これだけ成熟した娘が恋にだけ疎いのは、
先ず自らを律するからに他ならないだろう。

「あいな、弥也子。恋のひとつもしておいた方が良いでしょう？」

「必要かしら？」

したくなくても、してしまう事も有る。いきなり恋愛にうつつを
抜かして、自分がコントロール出来なくなるよりも、多少は耐性を
付けた方が良いでしょう。

しようと思つて出来るものでも無いが……と、恋愛が必要な理由
を説明すれば、弥也子は頷いた。

「ならば、もう少し様子を見て、省悟に恋をする様に努力してみま
す。」

「……努力か。」

「しないよりマシですわ。」

それはそうだ。
しかし。

「様子を見て？」

「今まで考えた事がございませんから。婿候補としての観察と採点
を。」

「11才……の自分はどんな子供だっただろう？」

私は自分の子供時代に思いを馳せた。

「ですが、婚約に否やはございませんわ。」

「恋をするかは考えるのに？」

眉を寄せると、弥也子が苦笑した。

「判断を誤る元は、省くべきですわ。それに、冷静な操縦が不可欠と見るならば、恋心は邪魔な気もしますわね。」

少女の声が、らしからぬ計算高さを覗かせた。

「あのなあ、弥也子。」

「はい。」

「お前は言葉を惜しむキライが有るな。」

「……… 自覚しないではございませんが、問題が？」

「弥也子が省悟くんを好きだと私には判る。」

弥也子は嫌そうな顔をした。

「だがなあ、弥也子の話し方だと相手は誤解する。」

「？」

「弥也子は、省悟くんならいつか愛せると考えるんだろう？」

怪訝そうに、弥也子は頷いた。

「だが、今のままだと、家の為に好きでも無い男と結婚する娘に見える。しかも計算高い。良くないなあ。良くないぞ。」

弥也子は苦笑した。

「省悟はそんな、愚かで鈍い男には育ちませんわ。」

恋を理解しないと云い乍ら、恋する男を自慢する娘にしか見えな

い笑顔を弥也子は浮かべた。

娘の倖せな未来を確信した瞬間だった。

そして婚約したが。婚約期間は4年で終りを迎えた。

海島省悟の弟が事故で死亡した為だった。

普通なら有り得ない死に周囲は騒然としたが……もちろん絶対無い等とは誰にも云えないし、実際起きてしまった。

娘は溜め息ひとつで、その事実を受け入れた。

恋を、していたのか。しないまま、終わったのか。

私は聞きはしなかった。

ただ、娘が残念そうだとは見て取れて、柄にも無く……私は娘に婚約を奨めた事を少し後悔した。

本人は自覚しなかった様だが、暫くの間溜め息が増え、時々寂しそうな表情が娘の顔に浮かんだ。

4年の歳月は、幼い娘が女性の顔を見せる迄に成長する長さが有った。

それでも、まだ15才だ。充分にやり直す時間は有る。

週に二回。海島省悟と弥也子は食事を共にした。

子供達の仲を取り持つ目的で、と云うのが建前だが、実際は弥也子にベタ惚れの海島の息子が強請った事だった。

海島の息子は自分ばかりが弥也子に執着していると感じていた様だったが、そんな事は無い。

弥也子も毎週楽しそうで、世間で云われる様に『初恋を叶えた美しいカップル』が生まれるのは……間違いないと思えた。

もちろん、弥也子に聞いてもはぐらかすばかりだったが、娘が海島に惹かれる様子は、私には明らかだったのだ。

微笑ましい幼いカップルが、そつと口付けを交わす場面さえ、私は見て見ぬ振りをした。

それ以上はダメだぞ？

思ったが口にはしなかった自分を褒めたものである。

もし口にしたならば、娘からは軽蔑どころでは無い冷え切った眼差しが返された事だろう。

弥也子は口では大人びた事を云うし理解を示すが、その実かなり潔癖な少女だった。

例えば加那子ならば、夫に愛され自分も素直になれるならば、過去を水に流しもするだろう。

だが、弥也子は自分に否が無い故に、相手にも厳しい。いや、他の事では寧ろ自分に厳しく相手に甘いくらいなのだが………多分、海島の息子は浮気などしたら、一見優しい笑みでどんな立場に置かれるものか。

静かに怒る娘が容易に想像出来たが、その怒り故の失敗さえ娘はしないだろう。

娘は「切り捨てる」か「許す」かを瞬時に計算する女に育ちつつ有る。

許す場合も、決して次の過ちが起きない様に行動する。

海島は二度と浮気など出来ないだろう……などと、最初の過ちも無いうちから考えたのは、弥也子が随分と海島を評価するからだ。

奴も一度。

弥也子の軽侮に満ちた冷ややかな眼差しを、存分に浴びるが良いのだ。

そんな嫉妬とも心配ともつかぬ感情も、不要になってしまった。

私は娘が気に掛かり、珍しく屋敷に滞在したが、娘は親の気も知らず私を邪魔だと思った様だった。

別に邪険にされても構わなかった。娘が少しでも元気になるなら。

次は、健康なのはもちろんだが、柵しきりの無い男を選ぼう。

そう考えた。

上の娘の結婚生活は、余り上手く行かない様だが、下の娘の事で心配した事は無い。

思えば弥也子は手の掛からない娘だった。

母親ベツタリの娘だったからと云うのも有るだろうが、元来我が儘な性質でも無く、大概の事は自分で解決する様だった。

人を使うのも上手く、使用人達は私より弥也子の言葉を重く見る傾向さえ有る。

海島の息子も、幼い乍らも面倒なタイプだと聞いたのに、弥也子は掌の上で転がしていた。

どんな男を選んで、その男は弥也子に夢中になるだろうし、弥也子が下手を打つ事も無いだろう。

実際に。

16才になった弥也子に奨めた男は、恐らく加那子が相手なら選ばなかっただろう。

それこそ切れ過ぎるキライが有り、傲岸不遜な性質は、加那子には御し切れないだろう男だった。

だが、弥也子なら何ほどの事も無いだろう。

手も無く夢中にさせられる男の未来を想像した。

そして、これが一番重要だが、もちろん弥也子が好ましいと思う男を厳選したのだ。

弥也子の好みは加那子と違って判り難い。正直大変苦労したのは、娘の好みを把握する事だった。

それ迄に却下された婚約者候補は引きも切らない。

海島の息子以上に弥也子が気に入る男を探した。

それは、もはや戦いだ。弥也子が頷く相手を探して見せる。私は多少意地になっていた。

二人を逢わせた日。帰宅した私は、弥也子が婚約を了承した事で、その戦いに勝利を収めたのだ。

「嬉しいだろう？西園寺くんは弥也子のタイプだろうか？」

勝ち誇るまま聞いたのは、余計だったかも知れない。

弥也子の眼差しは一瞬軽蔑を宿した。

パパはちょっぴり傷付きました。

西園寺静の、その傲岸なまでの性質を、弥也子が気にもしない風なのは思った通りだった。

しかし……考え難いが弥也子でさえ、あの男を従えるのは難しいのか、それとも変える必要を認めないのか。相変わらず、男は不遜な態度を崩す事も無いらしい。

使用人から案じる声も有った。それでも、私は心配など不要と断じた。

弥也子に任せておけば間違い無いと、当たり前のように考える己は、やはり親莫迦炸裂なのか……それとも、それだけ娘が頼もしく育ったと考えるべきか？

手の掛かる加那子も可愛いが、どんなにしっかりしていても弥也子も可愛い娘だった。

心配はしてしまうが、何だかんだで、加那子はあるで倅せな気もする。

心配はしていないが、弥也子にも倅せになって欲しい。

弥也子は自分では然程では無いと考える様だが、情の強い娘だった。

私は娘達が倅せになれる相手を選んだ積もりだ。しかし結果が保障出来ないのも、また確かな話ではある。

結局、出来る事と云えば。
ただ、娘二人の倖福を祈るばかりだった。

恵美と海島 弥也子への執着

先程まで和やかに談笑していた。

中心の天使が席を外した途端、そこはやたら静かになった。

子供達を、社交の場に慣れさせる為の宴は、割と多い。今回もその手合いのパーティーで、小さな姿では5才程度の幼いドレス姿や生意気な蝶ネクタイを見掛ける。

大人と少女が談笑する光景は珍しいが、彼女に限って言えば、それは見慣れたものでも有る。

塩野弥也子は幼い頃から社交界のアイドルだった。そして早、16才のデビューを迎える前から、社交界の華と呼ばれていた。

社交の場に慣れさせる為、と云えば聞こえは良いが。

少女も少年も良家の子女だ。

例えば誰が誰を好きになったとしても、それは微笑ましいカップルになれる。

自由恋愛を気取っても、所詮は政略結婚。

それでも、うっかりと違う世界の人を好きになるより、余程本人も倅せかも知れない。

少なくとも、家の事情なんかで、辛い想いをしなくて済むから。

恵美はそんな事をつらつらと考え乍ら、弥也子の背中を視つめた。

——遠目に見ても綺麗。

弥也子は社交的で華やかな場がよく似合う。
今日のドレスもとても愛らしくて、お人形さんみたいだった。
白薔薇の様にヒラヒラと重ねた薄い布が、淡い緑に透ける。
そこに赤い花が話し掛けた。

——涼子さま…だったかな？

島津家の長女の事はよく知らない。
中等部から美晴ヶ峰に入ったのは、弥也子も同様だが、随分と親しそだった。

それを恵美は不審とも感じなかった。

弥也子の顔が広いのは、今に始まった事では無いからだ。

——涼子さまも気になるな。多分大好きになる感じ。

恵美は第一印象を大切にする。本能で「好き」と「嫌い」を分類して、例外は有るにしろ大概の場合はその印象が変わる事が無い。

『まあ。随分と便利な嗅覚ですわね。』

弥也子はコロコロと鈴を鳴らすが如く笑った。

弥也子でなかったら、嫌味かと思うコメントだった。

ふと、恵美は自分と同じ様に弥也子を追う眼差しに気付いた。

——相変わらずだなあ。弥也子さまが羨ましい。

その執着は下手をしたら鬱陶しい迄の粘着力を持つ。
執拗に、情熱と崇拜を籠めた視線が、弥也子に纏わり付く。

——弥也子さまは軽く扱うけど、普通は怯えちゃうよな。

恵美は自分の事を棚に上げて考える。

——弥也子さまは、やっぱり特別なものね。

幼い頃から弥也子を追っていたのは、隣に居る男だけでは無い。
そう恵美は考えた。

その、男と呼ぶには未だ幼い、少女の様にキラキラした顔が、不意に恵美を見た。

弥也子以外には、口元に浮かぶ微笑みさえ冷たい印象を与える少年を、恵美は感心した様に見返した。

——本当にキラキラしいまでに綺麗な顔。プライドの高さも心地良いし、弥也子さまのモノで無いなら……理性が働かなかったかも。

「恵美さんは、随分と弥也子さんが好きなんですね。」

抑揚の薄い声が礼儀正しく告げた。

「ええ。海島さまとご同様ですね。」

やり込めるでも無く、恵美はニツコリと笑った。

——ええと。もしかして今のつて。いや。良いや。笑つとこう。

恵美は反射的に応じた自分を反省したが、笑って誤魔化した。端からは余裕の態度と取れて、それは海島省悟も例外では無い。

不機嫌そうに微かに眉が寄り、眸が細められた。

恵美が海島に抱いた第一印象は、「決して手出ししてはならない相手」だった。

恵美がそう感じたからには、つまり「絶対に兎さんにはならない相手」と云う事で。

なのに、弥也子には手も無く操られ、心を縛られて、跪く事さえ厭わない。

——羨ましいな。

別に海島に惹かれる訳では無い。

恵美は、モノにならない相手に対する興味を、スッパリと失う便利な習性を持つ。

決して自分のモノに成らない相手になど、一片も惹かれるものは無かった。

だが、もしも、海島が弥也子に恋する様に自分に恋をしたならば、それは恵美にとって理想の恋人の姿に近い。

——弥也子さまは、私とは違つと仰有るけど……この執着を放置する時点で同族だと思つ。

弥也子なら、それを不快だと思えば、海島の執着を優しい気持ちにシフトさせる事も可能だろう。

それをしない。いや。婚約後の海島が、弥也子に対する執着を増したのは明らかだったから、彼女はそれを助長させた訳だ。

——絶対同族だし。

恵美は心中頷いた。

その視線の先で、弥也子が天使の微笑を振り撒いていた。

「三条。」

この場では、子供達は男なら苗字か名前に様を付け、女なら名前にさん付けで呼ぶ習慣^{ならわし}だった。

別に明文化された決まりでは無いが、礼儀を無視した行いは嘲笑される元となる。

とは云え子供達は、時には大人達さえ、幼なじみも少くない場所^所で、それが社交の場だから、などと割り切れない事も多かった。

しかし。

この少年が礼儀を外し、我を覗かせるのは珍しい事だった。

「なに？」

小学生時代の呼び掛けをされたから、当時の口調で恵美も応じた。当時から今と変わらない口調だった弥也子と違い、恵美はこの世界に馴染まぬ「普通の子供」の言葉を遣っていた。

——弥也子さまも、こいつにだけは少し、砕けた物云いをしたけど。
恵美には飽くまでも優しい天使でしか無かった弥也子が、楽しそうに虐めて泣かせた相手が、この海島省悟であつた。

当時から、嫉妬の気持ちが無かつた、等とは云えない恵美である。

——弥也子さまの一番の友達は私だもん！

恵美は多少履き違えたまま、海島に対抗心を燃やしていた。
とは云え、弥也子に対しては滅多に無い程の傾倒を示したが、元より執着心や執念深さとは無縁の恵美である。

時折一瞬燃えるが、注意が逸ればウツカリ忘れる程度のモノでしか無かつた。

「お前。やっぱりレズか？」

「何故？」

何故そうなる。と。

怒りよりも、意味を問いたい気持ちで、恵美は首を傾げた。

海島は虚を衝かれた様に眸を睜つた。

苛立ちを籠めた眸の色が、本来の涼しさを取り戻す。

剣は戻らず、口元の皮肉に歪められた笑みも溶かれた。

そして、ゆるゆると表情が和む。

弥也子を相手にした時程では無いが、破格の扱いを受けつつあると恵美は感じて、更に疑問を募らせた。

「何だ。本当にただの友達か。」

「……………ただじゃないわよ。親友だもん。」

惘然とした恵美であつた。

海島は笑つた。

明るい笑みは、冷やかな普段の顔と違って、好ましいものだった。

「悪い。弥也子の友達なら、俺にも大切な人だよ。」

優しい微笑の指針は、やはり弥也子だったが、随分な変わり様に恵美は眉を寄せた。

不快なのでは無い。

理解出来ないからだ。

「同じ口調だつたよ。弥也子と。そう言えば、お前ら時々双子みたいに似てるんだよな。中学上がってから、目の前にしてなかったら忘れてた。」

「さっきの態度の説明なの？それが？」

海島が頷いた。

「俺は女が相手だろうと嫉妬する。弥也子に関してはちょっとオカシイんだよ。」

「知ってる。弥也子さまの件で嫉妬したんなら別に良い。」

あつさり応えた恵美に、海島は苦笑した。

小学生時代を知る相手だからと、油断して気を赦す甘さなど海島には無い。

恵美はそれくらいは知っている。

卒業してから半年も経ていない。とか、そんな問題でも無いだろう。

海島は昔から、弥也子しか見ていなかった。

——やっぱり恋愛となると独り占めしたくなるんだな。めっちゃ牽制されたし。そりゃ、多少の独占欲やヤキモチは有るけど………私は他の友達に嫉妬はしないし。

恵美は取り敢えず、弥也子に一番近い距離を、もう暫く独占したいただけだった。

——ううん？やっぱりそれも別に良いかな？海島省悟が気に入らなかったのは………多分、単にエラソーだったからかも。

手を出してはならない相手。

そう思っている、エラソーな態度を取る男は屈服させたくない。恵美にはそういう悪癖が有った。

——私も相手は選ばないとだよ。

でなければ。

いつか、痛い目に遭わないとも限らない。

そう考えて、恵美は自重する事を誓ったのだ。

「なあ三条。あれ誰？」

「どの人？」

「いや。弥也子の傍じゃなくて向こう。赤いドレス。さっき、弥也

子がいつもより親しい感じだった。」

悔しそうな海島に、恵美は笑った。

「少しは控えたら？怒られたらどうするのさ？」

「素直に謝る。」

「……………」

「何だよ、その眸は。俺はね、弥也子にならいくらだって卑屈になれるんだよ。」

上品な笑みがキラキラの顔に浮かぶが、言葉の内容はそれを台なしにするモノかも知れない。

しかし恵美は感じ入る。

「カッコイイ海島くん。愛だね！」

賛美すれば苦笑が返る。

「ホントに全く似てないのに激似。お前らの男らしさ見習いたいよマジで。」

「なに？」

「ごちた海島に恵美は不思議そうな眼差しを投げ掛けたが、海島は首を振る。」

「いいから教えろ。赤いドレス。」

「うん？でも私近くで見ないと判らないかも……って、涼子さまじやん。」

「だから誰だよ。」

苛々と云う海島は大概、弥也子の前では猫を被っているのだろう。

「海島くんて、素顔オレサマだね。」

——やっぱりな。通りで私の琴線に触れた訳だよ。いや、弥也子さまのだから別に要らないけど。

恵美が呆れたと思ったのか、海島が睨む。

「弥也子に云ったら殺す。」

「……弥也子さま、気付いてると思うな。でも、私に喧嘩売ったのは黙ってて上げようか？明日学校で泣き付いて見ようと思ってただけ。」

ニツコリと笑う恵美に、海島は怯んだ。

「お前……大人しい振りして怖いヤツだな。」

「そう？どうする？」

もちろん、素直に詫びた海島だった。

「すみません黙って下さい。」

「棒読みですけど、許して上げます。」

「アリガタヤ三条さま、オウツクシドレスですね？」

こうして冗談にしまえるのが、社交術と云うものだろうか。
恵美は笑い乍ら感心していた。

「島津家の涼子さまよ。」

「……ああ。あの。」

島津家は名門だが、この場合の「あの」は、多少の不名誉を含んでいた。

家出した長男の代わりに、長女の入婿捜しに熱が入っている……と続く「あの」島津家である。

これが、美晴ヶ峰が舞台なら「あの」恋愛相談の……と続くのだが。

恵美は首を傾げた。

「どうした？」

「ん〜。不思議な人だなあと。」

——明らかに経験無いよね。だからって特殊な趣味って訳でも無い。

噂とのギャップに、恵美はつい真剣に視つめてしまった。

——淡泊で……ノーマル。感度は良さそうかな……と、そこ迄「見て」どうする。

自制した。

視線を逸らせば不思議な現象が見えた。

大人も子供も、浮足立つ様なザワメキが移動して来る。それは人の波が、「誰か」に道を開けて、空間の主演として讃える行為だった。

そんな存在は滅多に居る訳が無い。

恵美はドキドキした。

そして人の波が創る道は、弥也子の元に辿り着いた。

一瞬。

弥也子の眼差しに面倒な、とても云いたげな光りが浮かび上がり、
だが見間違えたみたいにキレイに消えた。

当たり前の様に天使の笑顔が向けられた相手は、びっくりする程
の美貌の持ち主だった。

広間にバルコニーから月の光りが射し込んだ……そんな錯覚に目
眩がする。

——怖いくらいキレイ。なのに、流石です弥也子さま。

周囲の人間は、彼の用を云いつかりたくて仕方ない様子だった。
弥也子だけが、彼を当たり前の人間として遇する。

息苦しさに、恵美は気付く。

息をするのも忘れて男を視つめた事実、恵美は驚いた。

「アレって、山瀬様……よね？初めて見た。凄いキレイ。」

「ああ。全くな。」

不機嫌な色を含んだ声に、恵美は「オヤ？」と海島を見遣る。
射殺さんばかりの、眸の剣呑さだった。

「山瀬様にまで妬くんだ？」

「悪いかよ。」

恵美は首を振る。

「そうか。揺らがぬ恋を持つ人は、山瀬様にも惹かれないうって聞くものね。」

——寧ろグッジョブ！ビバ初恋！万歳幼なじみ！って感じ？

流石に発言するのは莫迦過ぎる言葉だったから、恵美は心で海島を讃えた。

ウロんな眼差しで海島は恵美を見た。そして、何かに気付いた様に、不意に瞬く。

「お前は、狂わないのか？」

「……？」

「あいつに。揺らがぬ恋が……お前にも有るのか？」

恵美は質問の意図を納得した。

まさか、と手を振る事で否定を示す。

「面倒そうだから、気合い入れて自制心総動員しただけだよ。」

「……………弥也子も、そんな事を云っていた。」

呆然と海島が呟く。

恵美も多少は「山瀬」の毒にやられて、その様子には気付かない。

「やっぱり？でも身近で我慢するのは辛そうだね。近くには行きたくないわ。私。」

「家の為に必要だったら……どうする？」

ええ？と嫌そうに恵美は顔を顰めた。

「仕方ないから挨拶するけど……気に入られる様に頑張るけど。嫌だな。理性との戦い半端無さそう。」

「三条。」

「ん？」

やたら真剣な声音に顔を上げると、海島が自嘲の笑みを浮かべて恵美を視つめていた。

「なに？」

「お前が居てよかった。助かったよ。」

「……そう？」

「ありがとう。」

「どういたしまして。」

判らない事は追求せずに適当に応じる。そんな習性が恵美にはあった。

——弥也子さま流石です。

恵美の意識はすぐに、今や会場の中心と化した、弥也子と山瀬の二人の笑顔に引き戻される。

——こんな風に、山瀬と接するのは……確かお気に入りって事よ、ね？

恵美は溜め息を零した。

あんな化け物みたいに美しい人とも、平然と接する弥也子を、やはり特別な人だと感じた。

——凄いなあ。流石だなあ。

真っ直ぐに、恵美は弥也子を賛美して、ウツトリと美しい一対を視つめたのだった。

その隣で、冷静さを取り戻した海島は苦笑していた。

弥也子から散々聞かされていたのに、恵美の真価に接して、今日初めて友好的に手を伸ばした海島である。

しかも、かなり助けられもしたのだが、恵美は特別な事など何もしてないと考える様子だった。

「弥也子の友達……だったか。」

それが既に特別だと、気付くべきだったのだろう。
海島は自分の目が曇っていたと自省した。

「まだまだだな。」

「ん？」

「いや。なあ三条。」

「うん。」

「俺頑張るわ。」

「うん？」

「弥也子に相応しい男になれる様に。」

軽い口調だったが真剣だった。

恵美には解ったようだった。

常の心を窺わせない笑顔では無く、意志を宿した強い笑みが返された。

「頑張れ！私も弥也子さまの親友として恥ずかしくない様に頑張る！」

「おお。頑張れ。」

何故だか闘志を燃やされた気がして、海島は首を捻った。

「わっかんねえな。喧嘩売った時は買わない癖に。」

解りにくい幼なじみに、海島としては珍しいくらい粗雑な口調で、ボヤいたのである。

「俺は先ず。お前らより、男らしくならないとな。」

婚約者も幼なじみも……少女二人は、なまじつかな男など対抗出来ないくらい、強くて潔い。

勝ちを狙うのは、無謀かも知れなかった。

誰が相手でも怯まず闘う気概。許すと口にすればサッパリと確執を忘れる。

どう考えても、少女達の方が、海島よりカッコイイ。せめて、負けを認める程度の潔さを見せないと、男でいる価値も無いだろう。

「しかも、こいつらカッコイイ時は無自覚なんだから。全く。」

ハードルが高すぎる。

感謝も賛美も、だから相手の心には然して響きもしない。だから放置しようだ等とも思える筈も無く。

「借りは返す。いつか必ずな。」

一人呟いた海島省悟だった。

まさか弥也子に逢いに來た訳でも無いだろうが、山瀬は早々に姿を消し、パーティーは元の様相を取り戻した。

それでも山瀬を目撃した興奮が残るのか、常よりさざめきが強く、影響が全く無いとは言えなかった。

「ねえ。あの人誰？」

「朝丘洋。気になる？」

「うん。と、今近付いた人は？」

「岬佑也。朝丘さんとは親友。気になる？」

「んゝ多分？」

「あちらは？」

「……………朝丘詩織。」

せつかく春ヶ峰に通う海島が居るのだからと、恵美は質問を繰り返した。

名前を答えるだけだ。最初は適当に応じた海島だったが。

「あの人達は？」

「全部？」

「全員。奥の底意地悪そうな人からお願い。」

「底意地……悪そうに見えるんだ。じゃあ左回りな。三宅総一郎。麻生忠之。月野誠太郎。加倉良高。他はヶ峰じゃないな。藤院柊一郎と安永貴志。」

三条は内心で反芻した。
首を傾げる。

「安永家はどちらの？」

「……N市の豪族。」

納得した様に三条は頷き。

「あちらは？」

「柏木弘也。つつか既に高等部ですらないぞ。」

「あら、他の方は高等部生？」

「微妙なもの居たかもな。」

肩を竦めた海島である。

「ふうん。やっぱり凄いね海島。くん。色んな世代の人を……。」

褒めかけた声が止まる。

「あの二人は？」

「片岡と神崎の長男。」

「アレが。右は？神崎怜一？」

「いや。片岡真理。神崎の方が見込みが有るのか？」

海島が聞けば、三条は僅かに眸を瞠った。

「私の目を信じるの？」

「そりゃあな。殆ど、俺も辺りを付けてた相手だ。初見で見抜く目なんか、弥也子だけだと思ってたがな。」

「ああ、だって弥也子さまから教わったもの。」

海島は笑った。

「だから、普通は学んでも出来ないんだよ。逆らっても大丈夫かどうか。その辺りは、この世界に生まれ育つ内に磨かれるんだけどな。」

海島は少し考え、ひとつの質問をする。

質問と呼ぶより、確認だろうか？

「お前。莫迦にされた事無いだろう？」

「……割と海島。くに莫迦にされてると思う。」

「……そこ迄云い難いなら呼び捨てで良いから。いや、俺はまあ置いとけ。」

恵美が頷くと、海島は続けた。

「弥也子もだが、どんなに弱々しい姿でも、細く小さな存在に見えても、この世界に生まれて生きる奴には見える様になる。逆らったら不味い相手だってな。」

「……ああ。そっち。」

「どっちに比べたそっちだよ。」

海島は呆れたが、恵美は納得した。

「あれだ。海島に対する印象は3つ有るの『友達になつてこつ』と『手出ししては為らない相手』と『敵に廻すな』」

「後ろ二つって同じじゃ無いのか？」

「…………内緒。」

『手出ししてはならない相手』は失言だった。

読み解いた言葉を口にした訳では無いのが救いだつた。

「ええと。因みに、海島は弥也子様や私に何て見たの？」

「『逆らうな。』って本能が告げる。山瀬様ほどじゃないが、お前らみたいな奴が何人か居るんだよ。だが、それとさっきの相手はまた違つたろう？」

それこそどう見えるんだ？そう聞かれて、恵美は応えた。

「友達になりたい相手。」

「は？」

「いや、莫迦にするけど、弥也子さまも同じだって云うよ？」

「弥也子も？」

こつくり。

恵美は頷いた。

「だって『あ、この人大好きになる！』って思つたら大概凄い人だもの。」

海島の口元が引き攣った。

「いま、俺はかつて無く引いた。マジで引く。何だその本能。羨ましい。」

「うん？」

「そりゃ、お前らの交遊関係凄いの当たり前だわ。青田買いいも良いところだよ。」

「???よく解らないけど、ちょっと仲良くなりたくて我慢出来ない人居るから、行って来て良い？」

言葉通り、ソワソワと落ち着かない恵美に、ヒラヒラと手を振った。

「はいはいどうぞ。」

そして、視線は恵美の背中を追う。

視線が時々泳ぐ様子には気付いていた。

「成る程なあ。弥也子とはかく、あの面倒くさがりが付き合い広い訳だ。」

仲良くなりたくて、我慢が出来ない？それはタイミングを見抜く眸でも有るのでは無かるうか。

「つつか絶対、弥也子の眸とは別物だろうよ。」

弥也子は才能ぶらす計算。恵美のは野生の本能だ。

「って、女？しかも。」

赤いドレスの少女に恵美は声を掛けた。

じきに楽しそうに笑顔が交わされる。

「怖い奴。島津……か。一応注意しとくか。」

しかも。

恵美が眸を付けた相手は、一番年長でも20年は離れてない。特に多い世代は、海島の通う学園で高等部の生徒会メンバーだった。

「近い世代に随分とまあ。」

油断してたらエライ目に遭いそうだった。

弥也子の眸にもそれは映る。

「うっかり乗り換えられたら泣くぞ。」

海島は多少自惚れていたと自覚する。

恵美は、自分に対しては『友達になりたいかな』とは云ったが、我慢出来ずに話し掛けたりはしなかった。

野生の本能は、明らかにこの会場で、海島より才能が上の人間を選別した訳だ。

パーティーの間中、海島は弥也子を視つめるだけで無く、恵美にも気を配った。

恵美が自分から声を掛けた相手を見て、その相手と弥也子も談笑する姿を見て。

海島は、死ぬ気で頑張る決意をした。

「弥也子は、誰にも渡さない。」

海島は平凡とは云えない才能の持ち主だったが、まだ少年でしか無かった。

自分達を「普通」と信じる少女達に、太刀打ち出来ないと認めて楽になるには、まだまだ潔さが不足していたし、枯れてもいなかった。

10話 静さんの心変わり？

目覚めた時、隣に静さんは居なかった。

想定通りとも云えたが、少しだけ淋しいと感じた。

もしもこれが他の相手なら、こんな感情は湧かないだろうと思う。例えば省悟なら。彼はこんな仕打ちをしないだろうが、もししたとしても、私は怒るだけだろう。

——私はどうして怒らないのだろうか？

こんな目にあつて。あんな風に私を見下す男に、何故立腹しないのか。

そう考えると泣きたくなった。

——好きだから？

莫迦莫迦しいと思う。つまらない感情だ。

しかし、胸が締め付けられる様な、嫌な感情がある。

——恋なんか、したって意味は無いのに。

それは、理性を奪う感情を呼ぶ。それは自分を縛る枷にしかならない。

だから恋などしない。

頑なに考える気持ちを嘲笑うが如く、理性を押し退ける感情が奔るのだ。

――面倒な。

苦しくて、泣き出したい気持ちは、自尊心を傷付けられた痛みよりも、傷付けられて尚、惹かれる自分が情けないからだ。
悔しくて切ない。

省悟の時は、ただ困惑するばかりで、甘い関係に尻込みする自分に呆れはしても、認めずに生きていられた。
知らない振りが出来た。

――障害が有ると燃えるって云うのと、似てるのかしら？

ただ安穩としていられた、ぬるま湯で甘やかされた関係なら素知らぬ振りで無視した感情である。今無視出来ないのは、苦しいからだ。悔しいだけで無く、悲しいからだ。

――けれど、プライドを保つ為の争いは愚かの極みだ。

多分、このどうして良いか解らない感情が、姉夫婦の争いの原因なのだと、私は理解した。

本当の意味で、やっと解った気がした。

――ならば。私は姉と同じ愚は冒すまい。

せめて、争う事だけはすまいと考えた。
けれど、理性の言葉は心に響かない。

彼は何故。

――私を憎むのだろう？

頬に涙が伝うのを感じた。

無意識に泣く自分は久しぶりだと思った。

彼が私を求めている事は気付いていた。だから安心していった。けれど、同じくらい嫌悪されている事も、また知っていた。

――別に、大した事とも思わなかったのに。

実際に、身体に教えられたら堪えた。傷付いた自分の心にこそ衝撃を受けてしまった。

――莫迦らしい。

そう考え乍ら、愚かな感情に流されそうになる。

――どうせ憎まれるなら、更に深く徹底的に憎まれるのも良いかも知れない。………なあんて莫迦な事を考えたらダメ。

愚かな感情。

しかし理性の声よりも、余程響く声だ。

彼が私を憎む理由は何だろう？

私はそれを排除しなければならぬと思う。

多分、この愚かな感情は、嫌悪された屈辱と憎まれる事への悲しみが原因だからだ。

実際、彼は都合の良い男とは云い難い。

条件は満たしているし、理性が見る限りは100点に近い男性だが、感情面ではどうだろう？少なくとも、私の云いなりになる男では無い。

私に夢中だった省悟とは違う。

なのに、私は静さんを選んだ気持ちに、後悔さえ抱けないでいる。

——後悔なんか、した事は無いけど。

反省はしても、本当の意味で後悔などはしない。

しかし、いくら決意し実践しても、思い通りにならない事も有る。単なる意地かも知れない。後悔した事は、即座に忘れ、前向きな考えに切り替えるだけだ。

後悔した方が、余程楽な生き方かも知れないとは、時々思っけれど。

それでも私は選択した生き方を変える気は無い。どんな眼差しで視つめられても、私は揺らぐ気付かない振りが出来る筈だ。そう考えた。

まさか、向けられた眼差しがあんなものだとは想像出来なかったのだ。

陽は既に高い。

私は混乱した。

困惑した、と云い代えても良い。

静さんは優しくなってしまった。

やたら甲斐甲斐しく世話を焼かれて、私は内心嘆息した。

ある意味ではかなり立腹したのだが、目覚めた時に一人で考える時間が有った事が、理性を保つ助けになった。

バルコニーで頭を冷やしていると、室内に人の気配を感じた。

静さん以外では有り得ないから、多少怯みはしたが、そろそろ室内に戻るべきタイミングでもあった。

明るい真昼の景色でも、この季節は未だ肌寒い。

此処で愚図愚図して風邪でもひいたら、体調管理も出来ないと莫迦にされるだろう。

少なくとも私なら莫迦にする。

気持ちは落ち着いたが、蔑む眼差しに立ち向かうのは、未だ気が重い。

そんな我慢をしてまで、まだ静さんを好きな理由が解らなかった。もしかしたら私は被虐の趣味でも有るのだろうか。

——恵美さまは同類扱いするけど。

サデイストの友人の言葉は、常に否定してきた。私は暴力的な嗜虐癖は持たない。好みの男性が自分だけに見せる弱味や弱気にドキドキするだけだ。それは極めて普通の乙女心だろう。

そして、当たり前だが暴力を奮われるのも嫌だと思う。痛みに泣く気は無いが、我慢する気持ちも更々無い。

やられたら絶対報復するのが私だ。

その筈だ。

だが、静さんに出逢ってから私は甘んじて痛みに耐えている。屈辱と苦痛に心が苛まれるのを良しとする訳でも無いが、後日の報復すら私は思い至らない。

更なる憎悪を一瞬望んだのは確かだが、それは報復を目的としたものですら無い。

恥ずかしい話だが、静さんの愛情が半端に思えて、その天秤を揺るがしたい衝動に駆られたのだ。

静さんの心の天秤。

私は静さんに愛されている事を疑う事は無い。

恋に理解と共感を示す気は無いが、その気持ちを「知る」事は必要だった。私の気持ちでは無い。相手の気持ちだ。

私は省悟の気持ちを「知る」。その執着と愛情と情熱と呼ばれる恋を知る。

省悟は婚約を解消した現在でさえ、気持ちを抑え様ともしない。私になら何をされても怒らないし、嫌がりもしない。私の望みなら、何でも叶えようと躍起になる男だ。

同じように、静さんの気持ちを知る。

私に惹かれる気持ちを、常に抑制する彼を知る。理性を保ちたいのに保てず、私を憎む彼を知る。

愛してるから全てを許す省悟とは違い、愛してるから許せないと憎む静さんを、私は知っている。

——ただ。その意味はよく解らない。

省悟の気持ちは理解出来なくとも、知ればそれだけで手の内に取り込めた。簡単に操れたのは、省悟が操られてくれた、とも云える。

静さんは難しい。

天秤が揺らぐのが、時にまどろっこしい。

片方に傾けなくなる。

そして、愛より憎しみに傾けれ方が、余程簡単そうなのだ。

誰よりも強い感情を向けられたいと願うのは、きっと独占欲と呼ばれる感情だと思う。

——私なら、姉さんよりも余程上手く憎まれ役を演じる事が出来る。

姉の気持ちも少しは理解したが、姉は憎まれる事すら失敗している。

きっと彼女は、愛されたい気持ちにも揺らぐからだろう。

——私はそんな半端はしない。

しかし、そんな夫は不要だ。

だから思い止まる。私は自分の役目を忘れたりしない。

だが。

そんな衝動を抑える必要も、もはや無い。

静さんは変わってしまったから。

バルコニーで深呼吸して、私は振り返った。
彼が室内をぐるりと見回していた。

不安そうに見えたが、勿論気の所為だろう。

――何？

私が室内に戻ると、彼がバルコニーに視線を向けたのは同時だった。

一瞬視線が交わり、彼は安堵の感情を眸に宿した。

戸惑う私に静さんは云う。

「朝食を用意した。」

「はい。」

優しい声を初めて聞いた気がした。

男の人は、その「行為」の後で態度が変わると云うが………それだろうか？

しかし、世間話に聞くそれとも、少し意味が違う気がした。

「紅茶で良いですか？」

「はい。」

変な人だ。

甲斐甲斐しく世話を焼かれて、私は途方に暮れた。

――先刻までの悩みは何だったのかしら。

何故こんなにも変わるのだろうか。
罪悪感さえ、その眸に感じ取れた。
何故罪の意識など感じるのだろうか。

――解らない。

私は、この人をどうしたら本当に手に入れる事が出来るのだろうか。

憎悪の方が、まだ静さんの執着を感じられた。
その罪悪感は迷惑だった。

「片付けて来ます。待っていてくれますか？」
「はい。」

逆らう理由も無いから、いつも通り頷いた。
わざわざ部屋まで朝食を運んだのも、今までの静さんの態度からは想像出来ない。

いや。

もしかしたら、今日だけかも知れない。
いきなり人間は変わらない筈だ。

何かしら理由が有るにしろ、きっと明日には元に戻るだろう。

明日が無理でも、じきに戻る筈だと思った。

——意味が解らない。

まさか、ずっとそのままなんて思わなかったのだ。

お陰で憎まれ役計画に対する衝動は消えたが、正直に云うなら、
誘惑はより強くなったのも確かだった。

優しい静さんは、何故だか今までより遠く感じられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1100z/>

仮題 弥也子～美晴ヶ峰のお嬢様シリーズ塩野弥也子～

2012年1月13日15時45分発行